

俳句雜誌

令和元年十月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十二卷第十号

水 明

2019 10月号



信 風 節 季



夏の間は

大葉

今

穂紫蘇になって

刺身のつまに

脇役だけれど

存在感がある

水 明

第1069号

―歴代主宰の一句―

十三夜月を遠ざけ出の化粧

長谷川かな女

仏灯を秋思のいろとして消さず

長谷川秋子

雁渡し地に白線のふえゆけり

星野紗一

水明

令和元年
10月号

歴代主宰の一句

敬 礼 (作品)

山本鬼之介

4 1

岩槻城址公園 (近詠)

石山かつ子

6

池の端より (近詠)

境 延昭

7

大向うより ❷ 主宰作品の鑑賞

西山貴美子

8

季音「雪」 (同人作品)

矢作 水尾	山中
山中みどり	順子
	ほか

10

季音「月」 (同人作品)

田寺 玲子	吉澤
十倉 和子	純枝
	ほか

17

季音「花」 (同人作品)

森川 義子	田中
大場 順子	千穂
	ほか

22

鼓 笛 集 (同人作品)・私の一句

70・72

現代俳句鑑賞

網野 月を

28

金の鈴銀の鈴 ❷ 季音月評

町野 広子

30

新同人紹介

32



夏季競詠

網野 恵子
 矢作 月を
 水尾 内田
 ほか 恵子

夏季競詠作品評

山本鬼之介

63

水 琴 窟 (水明集八月号鑑賞)

池田 雅夫

68

俳誌望見

梅澤 佐江

27

句集喝采

井口 俊晴

41

水明例会報・各地句会報

74・77

新珠賞作品募集

84

九十周年・水明塾のお知らせ

82・85

水明発展基金御礼

87

風声・後記

86・88

題字・長谷川かな女 表紙・内田恵子 カット・福田千春

敬
礼

山
本
鬼之介

晩
夏
光
パ
ー
マ
の
時
代
経
し
鏡

惜
別
の
車
窓
の
頬
よ
夜
の
秋

ネ
イ
ル
ア
ー
ト
の
蝶
目
の
前
に
秋
暑
し

枉目立つ白木の卓に生身魂
近松の芝居がはねて十三夜
秋風や絶えて久しき旗日の旗
うるはしき蝻螂に会ふ女坂
誰がための挙手の礼かな秋の海

岩槻城址公園

石山 かつ子

草の露きらきら朝の日が射して
青栗や少年野球声囁らし
残暑なほ乳鋳錆びし大手門
翡翠や望遠レンズ一斉に
翡翠の水弾いては同じ枝
爽やかに肩車して若き父
藩校の屋根の燻蒸秋暑し

夏休みもあとわずかとなった公園に少年野球の元気な声が森にひびく。この場所は太田道灌の築城のあった所と聞く。今は碑一つ建っているのみだが池があり、木々の大樹が茂っており春は桜の名所である。四季おりおり市民の憩いの場となっている。

池の辺りまでゆくと四阿にカメラを持った人々がいる。突然に緊張が走った。翡翠が近くに來たらしい。池の面を叩いて枝の先に止まった。横から見るとぜんぜん美しくない。もう一度、こんどは背中が輝いていた。

池の端より

境

延昭

日の盛り博士の像は禿頭
三四郎池緋鯉が亀にそつと寄る
書籍部に「筋トレ入門」ある晩夏
カンナ咲く学舎に都バス操車場
白粉花裏門からの石畳
水澄んで江戸の名水「飲用不可」
本郷の大きくすの木や鰯雲

現代俳句協会が定期総会などに使う上野東天紅が南の隣地に移り、その跡地に高層マンションが建った。静かだった池の端辺りも変わりつつあるようだ。この界限でサラリーマンの最後の八年を過ごした。東大の池の端門がすぐ近く、門からは緩やかな登りの石畳が構内へと続く。普通の石敷きと違って石柱を縦に埋め込んだもの、蔦の這った古い煉瓦造りの研究棟共々私の好きな空間である。池の端門の脇に境稻荷神社がある。名前は偶然の一致、東大同様に縁もゆかりも無い。

大向うより

● 主宰作品の鑑賞

西山 貴美子

七月号

初夏や常の着物も粋なひと

ふつと我が家にある黒田清輝の絵（勿論レプリカ）が心に浮かんだ。バブルの頃、テレホンカードにもなった名画である。湖畔に立ち白い団扇を持つ姿は、ブルーが基調で涼しげであり粋である。題して「湖畔」。夏の絵だが気に入って一年中楽しんでる。

近頃、着物姿を余り見かけないが、常着の衿をちよつと抜いた姿など小粋さがあり、男性ならずとも振り返りたくなくなってしまふような光景である。

新調の赤ちやうちんに薄暑の灯

現代俳句協会の総会のあと、浅草の鮎屋横丁の「沢正」へお供した事がある。三橋敏雄先生も山本紫黄先生も御健在であった。貸切りのような店の中で、店主の演じる新国劇の国定忠治の一場面にやんやの喝采。ふと目の前の壁の主宰の名入り提灯に目を疑った。今は亡き紫黄先生、高野万里さんの提灯もあるではないか。今は、一と昔前の事である。

あの赤提灯に薄暑の灯が何時灯ったのか今は知る由もない。

薪能われは心の足はこび

各地で毎年行なわれるようになった日本の文化、薪能は、京都の平安神宮が発祥の地である。

辺りが薄暗くなりかける頃、篝火に火をつける火入式は、まるでオリンピックの聖火の点火さながらのセレモニーである。揚げ幕が上がり、橋懸りを静かに登場してくるシテの摺り足がクローズアップされている。

さらびやかな光景ではない。シテの摺り足と向きあう作者の謙虚な胸のうちが伝わってくる。

葉柳やそろそろ出番お岩さま

歌舞伎「東海道四谷怪談」の女主人公お岩は、夫の民谷伊右衛門に毒を飲まされて恐ろしい形相になって悶死し、幽霊になって伊右衛門に祟る。という鶴屋南北の代表作である。お岩が毒薬で物凄く変貌し髪の毛が抜け落ちる「髪梳き」や隠亡堀の「戸板返し」など、したたるような夏柳の緑が映え、怪奇味が増す。世話物の四谷怪談を上演する前、お岩を演じる役者は新宿左門町のお岩稲荷にお参りするそうである。

女の祟りは怖い。やはり「お岩さま」である。

八月号

瑞兆の五代の空よ水明忌

昭和五年に創刊の水明は、来年九十周年を迎えようとしている。かな女、秋子、紗一、光二主宰のあとを引き継がれた主宰の感懐如何ばかりであろうか。水明忌であれば尚の事。「俳句」五月号で〈燕にも五代の家格蔵の町〉〈助六を夢見て花の男坂〉鬼之介、を拝見したばかりである。

伝統ある結社の主宰としての、きっぱりとした存念のうかがえる一句である。

残塁の選手を癒す薄暑光

一生懸命戦ったあとのさっぱりとした悔いのない笑顔は何とも気持のよいものである。勝っても負けてもさわやかさの残る光景である。

全国高校野球選手権大会の様子かと思つたが、「薄暑光」の季語から、その前の各地予選会の頃かと思われる。県大会でもシード校が敗れるなど、大分番狂わせもあつたようだ。

選手の首筋にきらりと光るものがある。何となく一声励ましたくなるような片時である。

献上の夏の和菓子 の和三盆

和三盆は、日本製の上等の砂糖である。白砂糖から糖蜜を

抜き、さらす工程を繰り返して作る。三盆白は結晶の細かい砂糖である。上等の菓子として薄紙に包まれ、夏の暑さの中でも日持ちもよい。品よく口中に溶ける程よい甘さは、高価ながら献上の和菓子として最上のものである。因みに、中国から輸入された上等の砂糖は唐三盆という。手間隙をかける日本製の和三盆は、御用達の夏の和菓子として更に上等である。

お染久松想へば翳る夏の月

江戸中期の浄瑠璃作者、近松半二の上・下二巻の世話浄瑠璃は〈新版歌祭文〉〈お染久松袂の白しほり〉として巷間に広まった。特に上の巻の、質店油屋の娘お染と丁稚久松の身分違いの恋から心中に至る〈野崎村〉は世評も良く有名である。文楽（人形浄瑠璃）の義太夫三味線の華やかなメロディーに何とも言えない哀感を覚えた日の事をまざまざと思い出した。〈是評判浮名讀賣〉〈お染久松色讀賣〉として歌舞伎化もされ、〈野崎村〉は同題材の作品中でも名作として人気を呼んでいるようである。大阪大東市野崎の慈眼寺の境内には、お染久松の塚もある。

月といえば秋の季語を思うが、梅雨晴の夏の夜に仰ぐ月も風情のあるものである。流れる雲に一瞬掻き曇るような夏の月はお染久松の悲恋を想い起こさせるに充分である。

季
音
雪



鰯 雲 矢作水尾

伊豆相模 囲む一湾 鰯雲
草いきれ 抜けて 峠の風にあふ
青葉濃く 日向日蔭のいろは坂
大仏ののしかかりくる 残暑かな
石垣の石の百態 蜥蜴這ふ

風の量 山中順子

坊泊り朝の高野の新豆腐
意にそはぬ風にも 乗りて草の絮
秋桜風の量ほど 揺れてをり
リフトの足草にこすられ 鰯雲
遠雷や ゆつくりと抱く山の昏

魂 迎 へ 山 中 みどり

明々と灯し寂しき魂迎へ
亡き人の気配に灯す盆提灯
送り火の麻かるがろと燃え尽きぬ
仲見世は異人の埵塙夏の果て
電気ブランの氷片くらし夏終る

俱 会 一 処 由 良 ゆら女

一村は水の閑けさ秋茜
風音のささくれて来る黍畑
唐黍に雲はやさしくなつてゐる
敗戦日征きて帰らずかの指輪
送り火やブラックホール俱会一処

縁 淡 し 吉 住 光 弥

飛魚とべり鑑真の海かきわけて
寝冷子や竹林蒼き雨あがる
日本海に加賀百万石の水落とす
落し水力走やがて力抜く
はらからの縁淡しよ衣被

コ ル ク 栓 網 野 月 を

みんなみやどれが己か枝の殻
兵隊に曳かれ殿様バツタかな
ビー玉のことなど語りラムネ飲む
人の手の入り加減や草茂る
遠火花途中で割れたコルク栓

海 霧 石井喜恵

夕風や明日を透かす合歓の花
合歓の花路せまくして長き坂
海霧深し港のカフェで飲む珈琲
海霧深し謎が謎よぶ難破船
訃にありて握り締めたるハンカチーフ

いわし雲 石山かつ子

恋を絶ち茶を絶ち秋蚕あがりけり
内輪なる明日の慶事の芋を掘る
何よりも水が自慢の新豆腐
いわし雲飛天の衣流れゆく
山水を樋で引きゐる新豆腐

秋の蟬 大橋廸代

一天を消す大群の蚊食鳥
道行のあげは8の宇宙に描く
首伸ばし毛見のまなこや鷺の長
すずめ二羽稲穂の波に溺れけり
春日局おつぼねの湯屋は板張り秋の蟬

安 居 大村節代

合歓の花老女も時に伊達眼鏡
ねぶの花土偶の腰の豊かなる
黒光りする足踏みミシンががんばる
笑ひ絵にががんば足を置き忘る
地唄舞の黒子の走る夜の秋

秋色 栢尾 さく子

竹伐れば茶筒に似たる芭蕉句碑
虫の音を聴き分けてゐる不眠症
冷やかや紋提灯の浮く軒端
蜉蝣の日ぐれ儂なきもの掴み
かげろふの縋るは風のアロハシヤツ

ビアガーデン 菊池 ひろこ

ビアガーデン次の季節の星座見ゆ
飲み干せばうかぶ星形ピアジョッキ
ビールの泡吹かれ屋上送別会
果物の種とぶ母子寮夕立なか
夕立や疎開地の土白かりき

阿波踊 小林 萬二郎

同好会てふ大学生の阿波踊
阿波踊リーダーとときにバリエーション
阿波踊 足並揃へ 女踊
桐一葉時季来れば散る人生も
何事も切つ掛け大事一葉落つ

稚児車 五明 昇

由緒書斜めになぞる蝸牛
ケルン積む男に傾ぐ稚児車チンケルマ
六根を浄めて泊る登山小屋
悠然と夕焼食らふ佐渡島
飛魚や遠流の島の荒岬

川の字の境延昭

晩夏 島津初花

川の字の真中の吾子を寝冷えさす
対馬へのジェットフォイルと飛魚の群
醜聞に怯まぬ女青とかげ
妻に手を引かれて入る踊りの輪
枝折戸やいま朝顔の大舞台

天花粉少女の髪のひとつ握り
桔梗の青紫に咲き満ちて
桔梗の蕾解かれて姉逝きぬ
走馬灯桔梗の白を染めもして
百日紅弱視の姉の小抽斗

向日葵 椎野美代子

晩夏 鈴木康世

向日葵や戦渦の記憶生なま
向日葵に足を絡めて共倒れ
「がつくり」は大向日葵の首なりし
お覚悟を問はる私と向日葵と
向日葵を小突きゴツホを語らせる

虚貝を浚ふ引き波浜晩夏
故郷のしやぎり背に聞く晩夏かな
垢離場跡乾いてをりし晩夏かな
峠茶屋に富士の夕映えみる晩夏
富士紫紺犬の遠吠え聴く晩夏

ミシン 永野史代

それは静かな落雷白衣観音像頭上
遠雷や胸内騒ぐ些事ありて
母のミシン眠る物置き日の盛り
指貫きのかすかにゆるくなる立秋
街中の人と人の間秋立てり

秋 入口 西山貴美子

秋暑し蔓先いつも揺れてゐる
べた足の仏陀にまみゆ秋暑かな
桔梗や愛は淡味と思ふべし
あてのなき旅のはじめの赤蜻蛉
逸り男を愛しと思ふ秋入日

月見草 波多野寿子

庭中に殖ゑて灯すや月見草
月光に白の際立つ月見草
袖触れる音かも白き月見草
花びらにかすかな震へ月見草
うすももに色変へ朝の月見草

後の月 服部みどり

星よりの使者めく瑠璃の蛍草
案山子はや土間に寝かされ十三夜
後の月句を語るには遠すぎて
蓑虫がたれ瞬かぬ神の牛
こほろぎに鳴かれ一と夜で古びし句

とろろ汁 星野和葉

秋の七草 森 千代子

長廊下 蹠に優し 夜の秋
茅葺きが店の看板とろろ汁
いつまでも気になる一言とろろ汁
風呂敷の技改めて西瓜下ぐ
真つ赤つかを折りて包丁大西瓜

一山を占めたる葛の花匂ふ
風雨過ぎ萩のかんばせ失せてをり
人あれど花の名問ふ人なき尾花
撫子てふやさしい言葉貫ふ意味
桔梗との絆を思ふ遠き日々

(順送り)

ピ ア ス 茂木和子

公民館筋トレ脳トレ梅雨明くる
日の盛り先行く男のピアス
文字掠る老舗の看板新豆腐
新豆腐のせて移動販売車
新豆腐舌に少しの力入る

☆

☆

季音月

八月 十倉和子

いつせいに日傘をたたみ黙禱す
 きけわだつみのこゑ八月の朗読会
 盆の月み霊迎への薄化粧
 更けてなほ風に乗りくる踊唄
 起き出して電子辞書引く夜の秋

須磨琴 田寺玲子

金魚鉢 森田祥絵

須磨琴の連弾を聴くたかむしろ
 石を積むだけの首塚黒揚羽
 沖めざすヨットへ午後の風戦ぐ
 坂多き港神戸の大夕焼
 夕迫る十字架に鳴く法師蟬

かはほりや山筆られし辺りより
 海ほたる白光と化す晩夏かな
 下草も二番茂りの晩夏かな
 縞蛇の縞見し眼鏡強く拭く
 金魚鉢覗けば軽い拒否に合ふ

大文字 吉澤純枝

橋渡る 小倉倭子

大文字崩れて賀茂の水明り
 少年の残暑の杜に笛復習ふ
 捨て舟に被さつてゐる秋暑かな
 百獣の王も伏したる秋暑かな
 拝観の靴向き向きに秋暑し

産土の隅田の花火の音遙か
 鉄橋を渡る真中の江戸花火
 集団の中の孤独や揚花火
 終幕の花火切なる音を引く
 夏の果胸に擦り傷想ひ傷

天衣 柚木治子

すれちがふ御太鼓結び風新涼
一葉の枯淡の下書き涼新た
道訊けば少女身構ふ木槿垣
紅芙蓉天衣に似たる雲一条
湯上りや灯影にふはり醉芙蓉

寝冷え 高島寛治

蚊を打つて聖母マリアの像に伏す
慎ましく生きて今あり枇杷する
国訛あやつる漢のサングラス
あご飛びりいつかは鳥になりたくて
うつ伏せの寝冷の稚児を裏返す

八月 伊藤敦子

ボサノバの最も似合ふ熱帯夜
原爆忌オバマの折鶴いづくへか
老犬の目に訴ふる炎暑かな
爽竹桃あの日も赫く炎えてるし
八月や焦げし記憶の甦る

秋の声 松本光子

戸隠祭古寺に踊りし若き巫女
神楽舞ふ鈴の佳き音よ秋暮るる
井戸に幣水の神事や暮の秋
蔵町の何処かでジャズが秋の声
形代に祈りて流す太鼓橋

盆供養 井上燈女

子の背に夫を重ねて盆支度
賑やかに子づれも混じり盆供養
夫のこと触れて盆僧帰りけり
落蟬や阿弥陀如来の手に抱かれ
角帯を粹にずらして盆踊

花氷 丸山マシミ

遣唐使の夢馳せし空つばめ魚
炎天を突き刺す一打湧く球場
銀ぶらの歩の止めどころ花氷
父と紛ふ兄が横座に衣被
上枝には風と戯むる薄紅葉

天の川 宇田白鷺

水打てば風が飛びつく夕べかな
若狭男の若狭に生きて天の川
墓参り母の歩調に合はせゆく
包丁を皆持ち出して研ぐ残暑
微風に露草瑠璃をこぼしけり

天 鳥羽和風

天の川流れる果てに戦火の地
天の川吾が子を流す罪ひとつ
竹串の鰯に焦げ目秋暑し
拝むや二百十日の神仏
身ごもるやずしりと重き種茄子

甲子園夏 森本早苗

接戦のピッチャーの上蜻蛉現る
受け答へ優等生や汗煌く
俯きて堪へ集むる汗の砂
応援団の流るるままの汗清し
夏鳶に頂点誓ふ次期エース

夕焼空 加藤むら子

きつちりと約束交はす夕焼空
想念の歩巾乱るる蟬しぐれ
立秋の窓全開し彩の風
会話する楽しみ秋立つ小公園
敗退におはぐる蜻蛉迎へたり

墓詣 川野妙子

美しき花束供へ墓詣
亡き人の声風に乗り墓洗ふ
手を合はす幼子二人墓詣
霊園に空地増えたり墓詣
時々守宮張りつく夜の窓

晩夏 藤澤喜久

ジャズ喫茶晩夏に古き馴染客
馬車道に瓦斯灯明治の秋燈
ペーカリーほのほの甘し翹雲
切抜きのサプリメントや秋暑し
魚影の水底は早や晩夏なり

秋に入る 渡辺 舍人

しんしんと母がり酷暑の白き道
菩提寺の縁の下なる蟻地獄
胡瓜揉む漆の箸添へニツポン人
日盛りの声涸れサツカー少年団
頬扇ぐ手話の仕草や秋に入る

天守閣 町野 広子

蔵町の古民家カフェ百日紅
そのままのあなたが好きよ百日紅
麦茶煮る麦茶より濃き布袋
夏の月いつも孤独な天守閣
ジグザグの外階段を夏の月

残 暑 中尾 笑子

鴉啼く人は残暑の吐息吐く
すすき野に入りて化け方考へる
糸瓜ぶらり昨日のことはさら忘れ
テイクアウトのコーヒー熱し海は秋
いわし雲フェリーつぎつぎ車呑む

晩夏光 岡野 順子

街路樹の枝下ろしかな晩夏光
ベンチ成す樹の切株も晩夏かな
塀越しに「初生^なりです」とミニトマト
このスープトマトがとも生きてゐる
衣被親子の口のねつとりと

夏惜しむ 内田 恵子

飛魚やスピードあげるサイクリング
貝殻も小石も骨と化す熱砂
夕暮のうはさ話に藪蚊かな
遠汽笛鋼光りの洗ひ髪
アイロンをかけしTシャツ夏惜しむ

村芝居 池田 雅夫

秋の夜を趣味に興じて無心なり
村芝居凶状持ちの役どころ
虫しぐれとときに独奏二重奏
いささかの雲の恨めし月の雨
夕霧の闇より深き帷かな

天高し 井関礼子

短冊を書くも久しき今朝の秋
未知数の一打伸び行く秋の天
若さとは眩しきものよ秋高し
雨を欲る狭庭の草木秋早
秋蟬の命愛しとひとしきり

秋暑し 荒井俱子

術後の身おきどころなき残暑かな
秋暑し病恐れず軽んぜず
ひとテンポ遅れ童の盆踊
盆踊今たけなはといふ活気
更けてより二重となりし踊の輪

残暑 川崎道子

黙禱の鼓膜を攻むる蟬時雨
生まれたる樹下で往生油蟬
つぎつぎに灯籠に火をかなかな
秋暑し迂回路示す菜つ葉服
祝事の昼酒が効く残暑かな

無尽蔵 霜中冬至

下駄はいて左器用で水を打つ
秋めきて無尽蔵なる鳥羽の溪
秋めくや母に癖あるお弁当
さりげなく仕舞ふ仕種や秋扇
露草へ風のあつまる女坂

☆ ☆

季音花

白桔梗 森川義子

絶筆の友の玉章白桔梗
聞き遂ぐる寂聴法話夜の秋
拭き上げし一枚ガラス秋涼し
たちまちに山下りて来る夕立雲
初秋や鳩が水飲むにはたづみ

流灯 大場順子

御忍びの王女の気分サン格拉斯
手を握るのみの見舞ひや合歡の花
鑑真の海穩やかに飛魚渡る
白絹を一气に裁ちて涼新た
つと戻る流灯の水生臭し

白上布 田中千穂

一鉢の一枝を撓め今朝の秋
誰人も常は善き人蟻の道
古稀を過ぎ漸く似合ふ白上布
江の電の軒ぬうて海晩夏光
籐寝椅子父の形にくぼみをり

新涼 山田美佐尾

何も置かぬ新涼の青畳
新涼や摺り足幽か能舞台
甲斐袖軽く着こなし秋初め
絶え間なく走る高速月のせて
田の隅の墓に桐の葉散りそむる

切通し 梅澤佐江

ビール酌む殺し文句を聞き流し
あの事はご内聞にと西鶴忌
ゆきあひの風も清かに秋はじめ
雨音に聴き五感や涼新たり
りんだうに風の集まる切通し

昼寝 松宮保人

紫陽花や一雨ごとに句碑の貌
軒折れむばかりに干さる大玉葱
只管に漁がさだめの海鵜かな
夏萩や水琴窟に耳傾ぐ
参道の念仏小僧や昼寝する

一番駆け 上戸千津子

風そよと一番駆けの秋の使者
鐘の音や小さい秋を高野路に
太陽に対抗するかにカンナ燃ゆ
無住寺に何を問ふのか法師蟬
お盆道知らぬ訛の家族連れ

帰省子 野口和子

帰省子の時に大人に幼なにも
送り盆遠き寺より鐘の風
跡取りの兄も老いたり盆迎へ
犬と歩を休めて滝の風の中
欲しがりし子等なく放す甲虫

落し文 原田想子

退院の一步炎天仰ぎけり
コルセットまたしめ直す酷暑かな
リハビリに励めと鳴くや法師蟬
猛々し酷暑は地球の怒りかも
命日の父の墓前に落し文

きらめく翅 井上玲子

舷窓に翅のきらめき飛魚の群
飛魚とぶや茜に染まる波頭
日盛りや無念無想の庭の石
寝冷えして不協和音の直中に
百日紅花柄こぼる妣の部屋

秋芽 矢島清

戻る家ふるさとなし秋芽かな
小さき手に歳の数だけ木の実独楽
門を出て秋光浴ぶる通学路
百日紅風生まれくる曲り角
山頂に登れば遥か雲の峰

爽籟

福田 藤十郎

九月

宮崎 雅訓

爽籟にみほとけ御座す奈良大和
室生寺に天衣の揺るる風爽か
大庇秋風ばかり初瀬の寺
敗戦日ラジオに涙長姉白寿
寛解の夫を連れ出すピアホール

登校の列わくわくと九月来る
登校の児童九月の風を受け
信号に黄旗持つ親九月来る
校門に九月の香り貰ふ子ら
始業告ぐキンコンカン九月来る

猛暑

井口 俊晴

踏切

鈴木 みや

真夏日や赤き月照る新都心
仏前に銘柄指定の缶ビール
差し入れの西瓜を潰す象の足
犬連れて一町ほどの登山道
巻き上げることさへ忘れ秋簾

大西日並ぶ空き家の他人顔
八月やふる里ありて父母ありて
行く夏の折込みチラシ気も漫ろ
前うしろ独り暮しや木槿さく
秋暑し踏切の音ぎいと泣く

竹箒

秋山 冷子

夏木 立

中野 疆

ひつそりと的場の隅の蚊遣り香
的の渦ねらひ狂はす汗の玉
木道の温みが好きで青蜥蜴
やんま狙ふ斜にかまへたる竹箒
不器用に削る鉛筆草田男忌

梅雨明けよ旅路の夜の赤ワイン
鬼押出し涼風来れば光る苔
夏木立奥になつかしホテルかな
アンセリウムつんとすまして浅間山
信濃路よ両手に一杯夏野菜

雲の峰 後藤綾子

館蜜豆昔の名前で呼ぶ仲間
赤信号身の置き所なし炎天下
天を突くビルを見下す雲の峰
ピヤホール何時しかサンバの踊りの輪
銀座には銀座の遊び生ビール

たなごころ 松井由紀子

聞分けのなき残暑打つ驟雨かな
ポアロ氏を投げ出ししまま昼寝覚
約束は三時溶け出す花水
へちま水容れて涼しきたなごころ
青き実をのせて秋知るたなごころ

茄子の馬 加藤草太郎

青春をいま呼び戻す夏罨
放射線浴びて一人の広島忌
露座仏の膝に零る萩の雨
焼き鳥の串を御足に茄子の馬
病床に色なき風の色さがす

あめんぼう 野平美紗子

夕焼雲火種いくつか水の星
じーじーと耳鳴り止まぬ夜の秋
姉妹好みそれぞれ花水
水馬影引き連れて遡る
あめんぼう流れに逆らふも一世

初嵐 松山清子

前山の雲の速さよ初嵐
卓袱台のはらからの顔麦こがし
道路工事の騒音に堪ふ残暑なほ
この庭園かつて火薬庫赤のまま
盆東風や隘路の続く漁師町

生ビール 菅原知子

線香花火想ひふくらみ落下せり
揚げ花火消えし瞬間の真空
ビール飲むをなごにはなき喉仏
生ビール親父俵の間柄
終電をやりすごしてや夏の月

具だくさん

福田千春

湯上りのビール極楽極楽と
副住職恐縮しつつビール乾す
天地人句会のあとの先づビール
立秋の朝具だくさんの味噌汁
大花火トリは煙たきナイヤガラ

赤蜻蛉

西浦千枝子

神やどる熊野古道や蕎麦の花
頭を小突かるる生家の庭の藤は実に
トンネル無い此の道が好き赤蜻蛉
妣の小言聞こえて来さう盆用意
ハザードランプで渋滞知らず墓参り

☆

☆

最近の名句集を探る

※座談会

水内慶太 「水の器」
山田耕司 「不純」
佐藤りえ 「景色」

今泉康弘
齋藤慎爾
筑紫磐井
野口る理

※巻頭三句

対馬康子
伊藤政美
山下美典

※俳句と短歌の10作題詠
鈴木太郎
甲村秀雄

二ノ宮一雄

※好評連載
網中いづる

池田琴線女

SEASONAL
KALEIDOSCOPE
筑紫磐井

※今月の華

朧潤

俳壇観測
坂口昌弘

荒井千佐代

忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人

※その時、俳句手帳

名村早智子

句の手触り、
俳人の響き
藤村公洋

※FRIEND 私の源流

飯田龍太

俳句のつまみ
二ノ宮一雄

齊藤幸三

一望百里

俳句四季

Haiku Shiki

2019年10月号

9月20日発売
定価1000円(税込)

<http://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

俳誌望見

梅澤 佐江

『天塚』 令和元年七月号 通巻第二五〇号

主宰 宮谷昌代 発行所 京都府宇治市

昭和五三年一月、木田千女が城陽市で創刊。師系鷹羽狩行「俳句即人間道」「一句の底に流れる愛の調べこそ俳句」を理念とする。隔月刊。(二〇一八年俳誌要覧より)

先ず以って、真鯉と緋鯉の滝登りの表紙絵の気迫に圧倒され、竜の幻を一瞬見たような気さえした。

主宰句 冠集「杜若」 二句より三句紹介。

フィナーレの桜吹雪を浴びて老ゆ

還暦も古希も序の口菖蒲風呂

女湯もどさりと入れて菖蒲束

満開の桜は見る者の心を和ませるが、咲き満ちて一陣の風に吹かれゆく桜の潔さには心を奪われる。来し方と折折の桜吹雪を重ねた心象風景に心惹かれると共に、句を通して凜とした小気味良さとその根底にある気概を感じる。

名譽主宰句 劍集「田草取り」 五句より一句紹介。

好きな人ばかりが死んで日向ぼこ

御年九五歳の千女氏、近い方々が次々と鬼籍に入られた。(好きな人ばかりが)に言い尽くせない悲しみや淋しさはもとより、その表し方に千女氏の可愛らしさが垣間見える。季語の(日向ぼこ)にほっとする。

碧玉集、勾玉集、管玉集、白鷺集より 主宰選一七句。勾玉集 二三名より 主宰選一三句のうち五句紹介。

子子の無音の中にタクト振る 能勢 ゆり

知恵貫ひ学校きらひの子を連れて 竹村 良三

亡き夫の褥とならむ花の雲 前川美智子

料峭や守り袋に身分証 松岡 寿

ため息のやうなチェロの音春深し 平 万紀子

管玉集 三二名より 主宰選 二句のうち一句紹介。

法律にグレーゾーンや黄砂降る 山口 了也

白鷺集 四七名より 主宰選 二句のうち一句紹介。

子の思ひ汲めずに過ぎて鳥雲に 栗本美弥子

正に人間道としての心理を突いた句や子や夫に向ける深い

愛の調べを鑑賞させていただいた。

巻頭言 主宰 「選句力」より

(作句と選句は車の両輪のように大切である。その為には多くの句会へ参加して多くの方々から学ぶことを積み重ね修練することと自戒している)と述べているが身に沁みる。

師系鷹羽狩行の「狩」の終刊の後継誌として片山由美子氏創刊の「香雨」同人・大野崇文氏のエッセイ「金剛の露」「香雨」同人・安里道子氏による勾玉集・管玉集の鑑賞、特別作品「もう二千歩」前川美智子氏、「月隴」糸井和子氏、松岡寿氏の現代秀句鑑賞、鉄中錚氏と平万紀子氏による句集管見、「珠玉一句」受贈誌(七七誌)より主宰抄出、誌上句会(選者は主宰及び勾玉集同人)、「香雨」吟行会に主宰の参加、諸団体との吟行等結社の有り様に竜を見た気がする。

現代俳句鑑賞

網野月を

鍋底の磨かれ癖や遠花火

池田 澄子

〔俳句四季〕 8月号・後姿より

中七の「磨かれ癖や」は圧巻であろう。確かに鍋底は頻繁に焦げて、その焦げを取るべくよく磨くのだが、アルマイトの鍋などは磨けば磨くほどその底に細かい傷がついて、一層よく焦げるようになるものだ。中七に「・・や」切れを配して、その後には五音しかないのに切れを受けきっている。座五の季語「遠花火」と上五中七の時空間の距離感が絶妙であるからだろう。他に標題の「猛スピードのつもりか揚羽の後姿」があり、また「爆笑のあとや枝豆どこへ飛んだ」がある。いわゆる澄子調（澄子節と言った方が解り易いかも知れない、といわゆる筆者は考えている）が炸裂している。

くちなわや地に永訣の花文字を

九堂 夜想

〔俳句四季〕 8月号・花文字より

叙景に徹しても比喻がこれだけ手が込んでいると、句の圧力が俄然増して来る。筆者は蛇のぬただった痕を「花文字」と形容していると解した。中七の「永訣」があるので、座五に「・・を」として「残した」の省略を利かせ余韻を作り出したのである。

窓閉め忘れ西日集りの壁新聞

小笠原 至

〔俳句界〕 8月号・かつて相馬により

「壁新聞」を「西日」が読んでくれている、ということなのだろうか。淋しい光景でもある。題にあるように震災、被爆禍がテーマになっているのであって南相馬市のがすがすぐに想起される。今でも「帰還困難区域」「避難指示解除準備区域」などの無機質な言葉によって表現されている福島県の十二市町村がある。涙が出るくらい悲しい言葉だ。それに比して「西日集り」の方がどれほど温かい言葉だろう。現実を客観的に表現しているとはいえず、掲句には血が通っている。

サングラス外し釣果を抱へけり

千々和恵美子

〔俳句界〕 8月号・船笛より

「抱へ」る程も大きな獲物であって、釣り中てた御仁は得意満面であろう。当然のように「サングラス外し」て素顔を見せて記念写真を撮影する。「サングラス」は頭の上にもずらしているのかも知れない。「外し」「抱へ」の主語は同一人物であって、俳句の構図としては簡潔に出来ている。解り易い分だけ、「サングラス外し」の意味を読み込むことに傾注したいものである。他に「日に晒し雨に打たせる天草か

な」「秋の風鏑のこぼるる捨て鏑」がある。

いつの世も隠し抽斗ほととぎす

〔俳句〕8月号・Lemonより〕

小川真理子

座五の季語「ほととぎす」は作者の断定なのである。季語と句意の関係性が直截的ではないので、初心者には解りずらい句かも知れない。季語の本意も句の意味も直線とは限らないのであって、曲線であったりもするのである。平面上だけではなくて、三次元、四次元もあり得るのである。寧ろその方が常である。上五中七と座五のベクトルの向かう先で両者はしっかりとランデヴーしている。他に「梅雨ふかしドボルザークは達磨顔」がある。「達磨顔」に大いに共感する。

かつてもものすがたなりしを溝浚

〔俳句〕8月号・愛より〕

大谷 弘至

非常に厳しい眼差しで物事を観察している。その分、表現も厳しい。研ぎ澄まされている表現で、一句一句の形と心が完全に一致しているのだ。しかし厳しいばかりではない。標題の「愛」が介在している。

登高の胸よりすこし棘出づる

〔豆の木〕No.23・ぶつかりながらより〕

大石 雄鬼

心象風景を叙することに巧みな作者なのである。『豆の木』No.23は二十五周年記念号である。掲句はその誌の第二十四回二十句競作豆の木賞受賞作品の内の一句である。平

易な言葉を使いながら独特な感性を表現していて、繰り返し読むうちに味が出てくるのだ。読者には気付かない毒が仕込んであるのだろうか。

花冷えの空の明るく切手買つ

〔豆の木〕No.23・きよお！より〕

こしのゆみこ

情景を詠んでいる句ではない。何かを何かをする、という構文で表現されている世界である。必然、句は能動的な内容になり、それに伴って能動的な表現になる。掲句は「きよお！」と題された連作十句の一つだが、どれも同じくらいの句圧がある。

花冷を辞令一枚持ち帰る

〔句集「火を放つ」より〕

佐川 盟子

コース料理を食べているようだ。全体に統一感がありながら、一句一句は個で読んでも十分に味わいが深い。例えば前句の上五の季語「花冷」の効き方は抜群である。後句の「容疑の男」に「サンダル」を履かせたのも気が利いている。様々な方向性の句を一句集に集約して、それでいて散漫さが無く、饒舌さも無いのはどういうことなのか。二〇三句がパズルの画面のようにがっちり同一画面を構成しているからである。

他に「工場の中が明るい秋の暮」がある。敢えて「秋の暮」にチャレンジしたのかな？

金の鈴銀の鈴

◆季音八月

町野 広子

仁王の眼に雫を見たり梅雨晴間

森 千代子

仁王立ちの言葉のように、寺門の両脇に安置される一對の金剛力士。勇猛・威嚇の相を持つ。梅雨晴れのある日、作者が訪れた寺門の仁王様の眼に雫が見て取れた。それは、あたかも涙のように見えたのかも知れない。強面の仁王にも一粒の涙……。何だかホッとすると共に心に温かい物が流れるのを覚える。「梅雨晴間」の季語がそうさせるのであろう。

香水の残り香のあり旅靴

矢作 水尾

句会で順子師の特選を戴いた句。何とも意味深な一句である。旅靴の主が男性と想像すれば、尚更興味深い物となる。残り香なので妻や恋人へのお土産ではなさそう。一体何処でどの様に香りが付いたのか、女性の嗅覚は侮れませぬぞ！一方女性の靴とすれば、若く華やいだ姿が見えて来る。読み手を色々と楽しませてくれる一句である。

馳せ参らず月下美人の宴とや

由良ゆら女

月下美人と知れば「馳せ参らず」は充分に納得の行く行動である。小さな蕾が日毎大きくなり、今日か明日かとその開花

を待つ。夕方の七時頃からいよいよ宴が始まり、一時も目が離せない。九時頃に花は満開となり、この世の物とは思えない美しさ。作者は連絡のあったお宅へと馳せ参じたのである。ちなみに筆者宅でも毎年、この宴が催されている。

激つ瀬を腰で分けをり年魚釣
水を渡り岩を渡りて山女釣

石山かつ子

一句目鮎釣の様を生き生きと描写。激流に棲む鮎を釣るには足腰確と流れの中に分け入るのである。激流に腰までつきり巧みに竿を操る。二句目山女釣。この魚は上流域の清流に棲む。正に上五中七の通りである。釣人は海に始まり川へ行くとか。筆者の兄は鮎釣の名人であった。

飛天図の指の先より梅雨の蝶

吉澤 純枝

寺の天井に描かれている天女の図。数百年経てもその色や図柄に人は心を奪われる。ふつくと面穏やかな天女。その時蝶がふわりと舞うのが見えたが、作者にはあたかも天女の指先から舞い出たかに感じられたのである。静と動が上手く表現されている。

三方湖のとりりと凧ぎて早かな

宇田 白鷺

作者在住の福井県南西部、三方町と美浜町に跨る名所で、掲句の湖の他に水月湖・菅湖・日向湖・久々子湖の五つの湖で成り立つ。台風等の天災もさして無いこの地では、湖も穏やかである。ましてや早のこの時期の湖には風も無く風いである。「とりりと」の表現に早の熱が伝わって来る。

参道の馴染のめし屋鯖の寿司

森本 早苗

鯖の押鮓で関西では通称バツテラと言う。実は筆者も好物である。参道に店があるので有名な大きな神社なのである。いつも参拝のあと、その店に立ち寄るのが習慣となっていて楽しみの一つなのである。気取らない店と鯖寿司、そして主の様子までもが浮かび、作者のお人柄と繋がる。日常の一部をさらりと詠み上げられた熟練の一句に出会った。

ポート漕ぐ地球をすこし操つて

渡辺 舍人

何ともユニークな一句に思わず笑ってしまった。權（オー）で水面を掻く動作を詠んでいるのだが、中七下五の発想が面白い。大きな宇宙の地球と言う小さな星に住まわせて戴いている私達。心地よくポートに乗っているあなたも、漕いでいるあなたも、気付いていますか？地球が操りたいと言っていますよ。他に

我が思わが膚甘いのかしら蟻走る

時の日やメトロノームのつまらなさ
時の日や時計をおかぬ秘湯宿

田中 千穂

一句目。振り運動によって曲の速度を知る器のメトロノーム。カチカチと単調な動きは、秒を刻む時計とはちがいが、それ以上変わる事はない。退屈とつまらなさを覚えたのは作者か又はメトロノーム自身かも知れない。二句目秘湯と言われる宿へ行くには時間を要する。漸く辿り着き念願の湯に手足を伸ばし、心ゆくまでゆったり過す。時間は考えたくない。時計をおかぬのは宿のおもてなしでもある。

蘆青む影の深さに稚魚の群れ

森川 義子

夏の沼や池・川に蘆が青々と茂る。その水際に目を移せば小さな魚が群れている。「影の深さ」と詠んだ事で、蘆の高さや水の深さも伝わり、命の営みは連連と続いている。開発が進む近年ではこの様な景は少なくなつて来ているのかも知れない。日本の懐しい自然を詠んだ一句。

わけもなくかたまり歩く子らの夏

矢島 清

子供とは不思議なもので、一人の行動に追従する習性がある様だ。蟻の巣があればそこに、犬が吠えれば皆で眺め、一人が犬を撫でれば次々と撫で、下校の子等は仲々家に辿り着かない感がある。夏休みの駄菓子屋の前には子供達が群れている。「買わない人は中に入らないで下さい」の張り紙の店を見掛けた。それはないでしょ！何所へでも友達とかたまりて行くのが子供。それもこれも想い出になるのです。

新同人紹介

— 令和元年 —



青木鶴城

水明入会 平成二十九年
所属句会 新樹の会・若松句
会・たかんな俳句会

折鶴に億のたましひ原爆忌
新涼や無心に挑む大書かな
秋の雲靴紐締むる岩場急
喰ひつかぬ水澄む沢のヤマメども
流星や明日の結果を疑はず

入会以来二年余、指導者・良い句会に恵まれ少しずつ俳句への親しみが増してきました。幸いにも新珠賞の受賞も出来、苦しみながらも句作りが面白く句会が楽しみとなっております。この度同人に推挙頂き俳人の仲間入りが出来ました。更なる精進をして参る所存ですので、ご指導を宜しくお願い致します。



秋山紅花

水明入会 平成二十九年
所属句会 新樹の会

捨団扇棚の隙間に差せしまま
砂山を連れ去りたるや土用波
峰雲や空を舞台に七変化
大空を吸ひ込み歩く登山道
くつきりと雨のち晴れの夏の嶺

この度は「水明」同人にご推薦頂きありがとうございます。「はじめの俳句教室」にて山本鬼之介主宰のご指導を受けることになり二年になります。まだまだ俳句の本当の楽しさよりも苦しみの日々ではありますが、新樹の会メンバーと共に続けて行きたいと思っております。今後共宜しくお願い申し上げます。



阿部幸代

水明入会 平成三十年
所属句会 桜蔭句会

シンボルのミモザ撓ひて女性デー
冴へ返るメタセコイアの空と地と
ペランダの干し梅句ふ夜半かな
カサツカサツブナ山深し神の留守
陶芸の窯赤々と冬に入る

「初心者歓迎！」という桜蔭句会の誘いに乗って入門した俳句の世界は、思ったより厳しいものでした。季語の不自由さや、一番描きたいものが描けず、伝えきれないものどかしさに悩みます。それでも続けていられるのは句会が楽しく、心に響く作品に出合えるからです。順子先生、会の皆様、これからもよろしくお願いいたします。



梅澤輝翠

水明入会 平成二十八年
所属句会 青葉の会

義兄逝き句に救はれし今朝の秋
揚羽蝶葉の裏側に子を残し
夕さりの底紅に酔ふ七十路
鶏頭の彩に負けじと心燃ゆ
踊子の下駄のひびきや郡上の宵

この度は同人にご推薦頂きまして有難うございました。
山本鬼之介主宰に心よりお礼申し上げます。
二十六年別所沼の講習会に参加するも縁がなく、二十七年に伺った時は終っており、再度二十八年に参加させて頂きここでやっと水明との縁を頂きました。
この縁を何時迄も続けていきます様に頑張りたいと思います。宜しくお願い致します。



大槻瑤蘭

水明入会 平成二十八年六月
所属句会 第一例会・第四例会・雛の会

秋の雲標高二千の秘境旅
イントロですでにステップ九月来る
星月夜デカダンスでふシヨコラかな
秋澄むや僧の背筋の一直線
自画像の素描もできず秋夕焼

此の度は、水明同人に推挙頂き有難うございます。約三年前、別所沼での「はじめての俳句」に参加したのを機に入会させて頂きました。以来、主宰をはじめ、諸先生や先輩方に御指導を賜りましたことを心より感謝申し上げます。これからも小さな発見を自分の言葉で詠み続けていけたら幸いに思います。今後共、宜しくお願い致します。



加藤でん治

水明入会 平成二十九年六月
所属句会 新樹の会・第四例会

春祭那須与一の撓る弓

ゆり博の山のどよめき麓まで

大西日齒科の冷房利かざらん

秋夕焼男体山も沈みゆく

俳諧を旅の朋とすかな女の忌

この度は「水明」の同人にご推挙いただき有難うございます。

時勢に乗ったラッキーな私は、今、七転八倒の苦しみに喘いでいます。どうも俳句のリズムに乗り切れない様です。名句と言われる句を、折にふれ、音読しているのですが……。

主宰はじめ皆様の御指導を宜敷くお願い申し上げます。



神田治江

水明入会 平成二十八年八月
所属句会 水明熊谷句会・野ばらの会

冴返る草木の黙野の傷み

短夜の明日の頁にしをり置く

蜘蛛の囀の揺れてざんげは風が聞く

円やかな一河の流れかな女の忌

神無月寺に読経の響きけり

この度は「水明」同人にご推挙いただき誠に有難うございます。俳句との出会い、それがご縁で多くの知己を得、豊かな時を過して参りました。風流的な内にも、人間臭さが表現できたらと思います。

今後共宜しくお願い申し上げます。



菅原真理

水明人会 平成二十八年
所属句会 櫻蔭句会

狭庭にも炎暑居座り家ごもり
蝉時雨ラタトゥイユ煮る厨かな
太陽と勝負するかにカンナ咲く
蝉時雨砂場に残る如露一つ
人恋しスマホが繋ぐ夜の秋

この度は、水明同人にご推薦頂きありがとうございます。初

た。
友人の誘いで始めた俳句ですが、今では私にとってなくてはならないものとなりました。日々の喜怒哀楽を俳句に詠むおもしろさ、さらに深めていきたいと思っております。今後共どうぞ宜しくお願い致します。



鈴木和子

水明人会 平成二十六年
所属句会 水明熊谷句会・野ばらの会

浮雲の真綿引きたり秋彼岸
遠き日の戦ひ知らぬ水の秋
碑の歳月重き残暑かな
親に似て帰宅するなり子も素足
やや寒のダム湖は碧く鎮まれり

この度は同人にご推挙頂きありがとうございます。初めて句会に参加してより、前主宰、和葉先生、順子先生、句友の皆様の温かいご指導を頂いて参りました。

これからも俳句の時間を一層楽しく学んで行けます様お導き下さいます様、どうぞ宜しくお願い申し上げます。



諏訪サヨ子

水明入会 平成三十年五月
所属句会 大宮読売俳句教室

アナログに徹し渾身賀状描く
春浅し根開けの兆し木々の声
夏浅し田は静謐の水鏡
螢火や一炊の夢たゆとうて
石円く清濁呑みて水澄めり

令和元年の「水明」同人にご推薦頂き有難うございました。「俳句四季」四季吟詠で星野光二前主宰の特選を頂いた事がご縁となり読売教室に入会いたしました。

山中順子先生渾身の指導のもと諸先輩の俳句に対峙する真摯な姿勢と温かい雰囲気の中、前主宰を偲んでおります。御指導よろしくお願ひ申し上げます。



田中章嘉

水明入会 平成二十一年
所属句会 花衣の会

秋の寺枯山水の木陰波
三秋の過ぎし日能登の男浦
三陸に松苗育つ秋の浜
曙の風に混じるは秋気配
八月の頂点目指す球児かな

此の度は水明同人にご推薦頂き誠に有り難うございました。山本鬼之介主宰始め各諸先生方に、御礼申し上げます。

未だ未熟な私には同人の荷が重すぎる位ですが、皆様方の期待に添える様、努力致す所存ですので宜しくご指導下さい。



橋本京子

水明入会 平成二十六年
所属句会 花衣の会・新樹の会

占ひのほのかな灯秋ふかし
自販機に鹿の餌を買ふ神の留守
カウンターに小さく乾杯おでん酒
空を行く狐銃音の二三発
梅香る野点の席に客となり

この度思い掛けず水明同人にご推薦頂き有難うございます。友人の勧めに重い腰をあげ花衣の会に入会し、今回かな女賞を受賞された大村節代先生のやさしい指導で続ける事が出来ました。今になりやっと俳句にスイッチが入りました。どうぞ宜しくお願い致します。



松島 勲

水明入会 平成十九年
所属句会 りそな俳句会

冬帽子屋台親爺の男意気
浅知恵に振り回されて去年今年
終年は山茶花の如散じたい
大根を抜かれて大地息を吐く
人生の目標定まる大試験

この度新同人になりました松島です。思い起こせば飲み屋で知り合った句会の方に薦められて入会したのがきっかけで、数回やったら止めると思いい入会したのですが本当に驚いております。今は、毎回兼題の俳句を考えるのがとても楽しみになりました。これからもご指導宜しくお願い致します。



松島寛久

水明入会 平成二十三年
所属句会 若狭水明会

若煙草年毎仕草父に似る
ニイニイの終日脳天割らんとす
父の歳越えてそばに猫と月
告天子三種の神器手わたさる
若布船和尚豊漁の木魚打つ

我が袖は潮干に見えぬ沖の石の
人こそ知らね乾く間もなし

二条院讃岐の百人一首の一首である。夏には夕陽が水平線に落ち、海へと続く棚田があり、山紫水明の地の讃岐の寺に私は住職をしている。皆様方との御親交を大切に精進致したいと思えます。宜しくお願い致します。



村杉清吉

水明入会 平成二十九年六月
所属句会 新樹の会

汗拭ひ高校球児取材受く
休暇明け宿題抱へ児等の列
ぼんぼりの灯が消えて天の川
草相撲母の声援童泣き
夏の風邪枕外れて夢の中

日々の季節の移ろいや何気無い生活を文字に表現できればいいと思ったのが俳句に関心を持った切っ掛けです。しかしながら、いざ取り組んでみますと、発想が広がらずその難しさに直面しています。山本主宰、句会の仲間励まされながら、ついていくのが精一杯の状態です。今後ともよろしくお願い申し上げます。



山口 韶子

水明入会 平成二十九年
所属句会 新樹の会

軒 離れ 縹 の 空 へ 初 燕
額縁に入りたる気分かげろひて
かりがねや杜氏の蔵に湯気溢る
着信の音二階まで秋気澄む
膝に落つ乗り来し人の雪の粒

「はじめての俳句教室」そして「新樹の会」へ、瞬く間に三年目になりました。入会して思い知ったのは、解らない言葉の多いこと。久々に漢和辞典を開きました。でも知ることは楽しく、それを使う場があるのも嬉しいことです。鬼之介先生には本当に一から丁寧に暖かい御指導を受けています。これからもよろしくお願い致します。

令和2年「現代俳句カレンダー」販売のご案内

「東京四季出版」製作の「現代俳句カレンダー」は、以前より水明発行所において取り次ぎ販売しておりましたが、PR不足もあって会員全体に周知徹底しておらず、本来の目的が果たされておられません。そこで、本年より誌上でご案内して多くの会員にお買い上げ願うことにいたしました。

ちなみに、「現代俳句カレンダー」は、現代俳句協会会員の著名作家による俳句や色紙・短冊に揮毫された作品が月ごとに掲載されたもので、日々の俳句モードを高めるのに最適です。もちろん水明俳句会からも主宰はじめ有力作家の作品が出ています。

上記の主旨をご理解いただき、早めにご注文くださるようご案内いたします。

- ◆受付窓口：水明発行所 総務部
- ◆販売価格：1,200円（送料別）

令和元年7月吉日

主 宰 山本鬼之介
総務部長 茂木 和子

句集喝采

井口 俊晴

◆新谷壯夫『山懐』

俳句アトラス

著者略歴 昭和十六年兵庫県生。平成十八年、戦場のOB俳句会入会、柴田多鶴子に師事。二十三年「鳩の子」創刊同人。「鳩の子」同人会長。俳人協会会員。

第一句集である。昭和三十九年に松下電器産業（現在のパナソニック）に入社した著者は、文字通りの「企業戦士」として働き、インドや米国に通算八年間も駐在した。平成十三年に定年退職し、本格的に俳句を始めたのは五年後であった。会社の先輩に誘われ、軽い気持ちで始めたという。

アンデスの山駆け下る雪解川

トッケーと啼く南国の守宮の夜

ガンジスの沐浴の群れ明易し

初鶏の関もて明るくメコンかな

海外勤務の経験がなければ詠めない句があちこちに出てきて楽しい。また、日本百名山を全て登るなど、なかなか多趣味な人である。

白山へ早苗の列真つ直ぐに

寝転んでアイガー仰ぐお花畑

一切の音を消し去り瀧の落つ

濡れし身を乾すにほどよき岩魚の火

「鳩の子」の柴田多鶴子主宰の序が懇切で驚かされる。俳句が大好きであった義父との「家族句会」の様子など、話題豊富である。なお、表紙の原画は、長年絵を趣味にされてきた和子夫人の作である。

◆中嶋秀夫『王水』

邑書林

著者略歴 昭和二十三年奈良生。五十九年、俳句を始める。平成元年「方円」入会。四年「方円賞」受賞。十一年、仕事多忙で休俳二十年、定年退職で俳句を再開し「狩」入会。三十年「狩」終刊、創刊された「香雨」入会。俳人協会会員。

第三句集。王水とは濃塩酸三に対し濃硝酸一の割合で出来た金・白金をも溶かす強力な酸性液。「季語の本質をとらえることによつて、どんな句にも負けない強い句を作りたい」（あとがき）との気持ちでタイトルとした。

天罰を受けしがごとく石榴裂く

大漁の船を嘩して冬かもめ

平成二十六年、この句集では早い時期の作だ。「石榴」と

「かもめ」、植物と動物、全く異なるが、何と言えば良いのか、

対象のざわめきのような感覚が迫ってくる。

売りに出されたる屋敷の大桜

灯点して夜会のごとし熱帯魚

境内を金箔貼りに銀杏散る

ページを繰っていくと花や樹木、魚や鳥を詠んだ句が目につく。やや下火になったようでもあるが、お屋敷が売られ、その跡にマンションが建つたりしている。桜の古木の運命が気にかかる。そのような句が多い。

己が美を支へきれずに牡丹散る

十葉と褒めどくだみと貶さるる

可愛げな花も引き捨て藪からし

夏
季
競
詠



兼
題

〔百合〕
〔日盛〕

傍題可

さいたま 網野 月を

日の盛幼は銀匙舐めてをり
やつぱり今日は何処へも行かぬ日の盛
若き人招きて日盛句会かな
ヴィオロンや百合の邸の窓辺から
跡継の無き洋館や百合朽ちる

日の盛土塀白壁続く道

内田 恵子

日の盛身じろぎをせぬ風見鶏

日盛の骨董市の鉄兜

白百合や銀の匙持つ赤ん坊

百合匂ふ錠剤ひとつ飲み忘れ

川 口 矢作 水尾

百合盛る巫女の捧ぐる鈴の舞
舟縁の蛸ひつばがす日の盛
公園のSL匂ふ日の盛
花街の小さき祠日の盛
日の盛鉄骨高く組まれゆく

鎌 倉 服部みどり

山百合やリフトを揺する山の黙
黒百合の嶺にらんらんと夜明星
百合の香に纏まりかけし匂が流れ
日盛や声宙吊りに竿竹屋
日盛やバイクの僧の薄衣

日盛りや長引いてゐるビル工事
日の盛り埴輪の口が「ぽ」と開く
草抜きてすつばき穴あく日の盛り
壺ばかり焼きし窯出し日の盛り
百合の首くるつと回りピカンの目

さいたま 山中 順子

日盛の銀座の辻に托鉢僧
セレナーデ奏づる構へ百合の花
日盛の天心を突く大クレーン
朝の靄寺領の山に百合匂ふ
熔接の火花が奔る日の盛り

さいたま 境 延昭

百合挿すやその紋章の王ありき
ヒロインに悪女の多し百合ひらく
百合の香に折檻されしひと日かな
日盛りや電車遅延のアナウンス
日盛りや食物連鎖小休止

横浜 正木 萬蝶

百合の花や七月八日忘れまじ
百合の香の他に色なき個室K
日盛りも佳し退院の日の大み空
大道芸を見る人ひとり日の盛
日盛りや工事現場にある静寂

和歌山 十倉 和子

一印で消えし父祖の田百合の花
日盛のユニボは時に胴震ひ
百合を抱き男ひらりとゴンドラへ
笹百合やのつべらぼうの双体仏
暮れのこる献花の百合の焦げくさし

和歌山 大橋 旭代

百合の花や七月八日忘れまじ
百合の香の他に色なき個室K
日盛りも佳し退院の日の大み空
大道芸を見る人ひとり日の盛
日盛りや工事現場にある静寂

坂戸 加藤草太郎

鬼百合の一花静けき外廁
白百合を残して暮るる奥信濃
高塚の草の打ち臥す日の盛
日盛に身じろぎもせず托鉢僧
日盛や風の天守に人の列

さいたま 五明 昇

願成就観音巡る日の盛り
日盛りや警笛高く列車行く
暮れ泥む野に白百合の灯るかな
日盛りや村に信号ひとつだけ
日盛りに狛犬そそと腰上げる

さいたま 高島 寛治

日盛りへ素顔のをんな小手かざし
取りあへず踏み出す一歩日の盛り
紅百合よそつと囁く京言葉
山百合に見惚れて君と行き違ふ
永別の礼ふかぶかと百合の花

さいたま 大村 節代

山百合の芳香に狂ふ画家の筆
カサブランカ朱唇拭くがに蕊をつむ
丹精のさゆり肴に一人飲む
木洩れ日に百合つんと立つ赤松林
裸婦像の水乞ふポーズ日の盛

さいたま 柚木 治子

日盛のホースで洗ふ象の皺
日盛の足裏をほぐす寺廊下
空壕に百合の香籠る淡あはし
野の風を軽くいなして山の百合
「白旗の少女」を想ふ日の盛

鴻巣 大塚 茂子

家垣に一輪百合の白極む
満目の百合に眩きまよひ道
両の手に山百合を抱き求婚す
日盛や草に沈める転車台
ダム底に橋現るる日の盛

東京 田中 千穂

動くものなき日盛りの道路鏡
日盛りの輸出車玩具めく埠頭
日盛りの谷間に揺るる架線工
姥百合の袖の背籠に匂ひけり
神御座す山より明けて百合の花

川口 吉澤 純枝

降りてゆくりフトに触るる山の百合
潮騒のとどく教会百合白し
唐突の死のあり百合の香に咽せる
日の盛り行つたばかりの峡のバス
日の盛りコップの水も馳走かな

さいたま 石井 喜恵

香煙の絶えぬ廃校野辺の百合
日盛やシャッター街の郷土展
白百合やオルガン響く天主堂
九回裏の二死同点打日の盛
百合の花マンション街の築地堀

行田 近藤 徹平

黒百合やひたむきといふ心もち
笹百合の広がる女人堂辺り
屋根工事激しさを増す日の盛り
日盛りの葬一つあり白き天
日盛りや十三回忌も泣して

横浜 永野 史代

美ら海に百合の声聴く慰霊の日
目を細めおどけてわらふ百合の蕊
融けさうな自画像抱へ日の盛り
日盛やあの娘の睫毛はづれさう
百合と寝る独りの窓を少し開け

大阪 由良ゆら女

山百合の雨に伏したる柚の径
鬼百合の人をまどはす匂ひかな
狂女にもなりたき日なり鹿の子百合
百合咲いてこの家はちきり嫁がある
兩人に別々の過去日の盛り

さいたま 石山かつ子

山百合の礼をつくして傾けり
山百合の傾ぎしままに獣道

さいたま 西山貴美子

百合香る約束果たす受賞の笑み
白百合や誰かの視線気にかかる

草加 小倉 倭子

鉄砲百合里わの風になぶられて
雄叫びはウィアーレッズ日の盛り
日の盛り猪口の危な絵ちらちらと

姫ゆり提げ学園行きのバスに乗る
山百合のあばたを揺する野路の風
切りたての君に的向く鉄砲百合

端正な卒寿の句集百合薫る

星野 和葉

東京 山中みどり

百合買うてモデルのやうに歩きけり
我はここ鉄砲百合の射程内
日盛や軒に小さく研屋座す
匂引でも出たやうな日の盛り

傍らに居る丈で良し百合香る
白百合やはぜつつ揺るる和蠟燭
角切りの塩昆布含み日の盛り
日盛りに音消して行く救急車
日盛りを闊歩少女等の脚長し

日盛やマリオネットの首傾ぐ
日盛や樹下に瞑想する漢

東京 鈴木 康世

さいたま 栢尾さく子

四阿に富士と対峙す日の盛
裏山を統ぶる山百合房多し
ハモニカは昭和歌謡を百合匂ふ

ビードロの声出す鳥や日の盛り
呼鈴も電話もひびく日の盛り
百合の花粉処理してありぬ公聴会
咲き揃ひしかも別別百合の向き
山百合のひとつつたつの他は闇

定宿の庭に百合佇つ退職期

東京 菊池ひろこ

床の間の重心ぐらり百合ひらく

清廉な恩師恋ふる日百合咲けり

松本 波多野寿子

紋章まね花弁を反らす野辺の百合

名水汲む老舗の庭や日の盛り
投げ入れの百合たをやかに人を待つ

揺り籠を置く静謐や日の盛り

窓開けて川音を聞く日の盛り
百合大輪消えてしまつた電蓄よ

日盛の路面レールの分岐点

白百合や朧に告げたる憂ひ事

さいたま 荒井 俱子

山百合や柚人の声風に乗る

押し押さる公園口は日の盛り
池に立つ川鶉の生る木日の盛り

さいたま 椎野美代子

日の盛り短き影を連れもどる

日盛りの池に沈澱せし目玉

バスを待つ黒衣の庵主日の盛り

白百合や待ちたる文のごと開く
百合の花剪れば一灯消ゆばかり

日盛や巢に羽搏けるコウノトリ

若狭 宇田 白鷺

日盛や観光船に小手かざす

美しきものひとひらみひら百合散華
百合の薬りんと張りたる花のあと

茂木 和子

山百合や昔隠し田この辺り

百合満開人生百年惚れ合うて
日盛の大樹の下の静かなり

日盛や三千院の石地藏

乱反射する日盛の水鏡

自販機の音を残して日の盛り

鳥羽 和風

日盛や木陰に犬の舌長し

深山路に咲いて誰待つ百合一花
旅先きに求めた百合の荷になつて

小川 森 千代子

白百合や花粉をこぼす花の中

木のやうに無欲になれよ日盛りは
さざ波を金波銀波に日の盛り

少年の影も鮒釣る日の盛り

日盛りやこの水旨し酒蔵の井

若ぶるに息子のシャッポ日の盛り

崖の百合競馬を囃し首ゆする
月山おやま仰ぐ百合を供花とし父の墓地
香に近くささやく百合の話など
日盛りや乱れし阿吽仁王仏
五輪近し鞭打つ根生日の盛

さいたま 吉住 光弥

夕闇を攻め白百合の白清し
風雨激し伏すこと知らぬ百合高く
車百合ゆつたり雲を泳がせて
校庭の凸凹曝す日の盛り
社への階段のけ反る日の盛り

千葉 森田 祥絵

背負籠に姫百合揺らし農婦行く
「百合」の声より先に百合匂ふ
疼く膝さすれば百合はそっぽ向く
一人佇つ影の短し日の盛
風通しよきを馳走に日の盛

田村みどり

黒百合や阿寒の岸に立つ女
山百合や棚田の畦の手弁当
白百合やチャペルに続く石畳
身を隠す京の怨霊日の盛り
日盛や牛の涎も出ぬ牧場

さいたま 保坂 翔太

山百合の一本気が好き結ばれる
一部屋を独り占めなりカサブランカ
横向くは怒りにあらず山の百合
日盛りや仲々飛ばぬ菱マーク
日の盛り死の商人か大統領

小林萬二郎

山百合に目立たぬ蔓の絡みをり
山百合の香も柀の内シャッター切る
飄飄と褪する杉玉日の盛り
日の盛り亀愕かす鳥の影
日盛や鯉の口開く濁川

曲淵 徹雄

鹿の子百合父祖の唾へし煙管かな
百人の瞳に飛び込むや百合の花
山百合や谷を横切り日が陰る
日盛や球兎に気焰ほとばしる
日盛の一両電車にひとり乗り

若狭 島津 初花

遺影写真のぼつんと残り百合香る
日盛や公園下の俄画家
葬送の列粛肅と日の盛り
鬼百合の席捲しゐる荒れ田かな
出棺の警笛長し日の盛り

日高 徹

鬼百合の追ひかけて来る匂ひかな
山百合や法螺を唸らせ験者来る
男来て百合の花束綱棚へ
日盛りの小雨狐の嫁入りか
ビタミンの特にCとる日の盛り

さいたま 橋本 京子

日盛を就労の子よ風そよげ
笹百合の白拍子めく葉隠れに
笹百合に足場危ふく見えにけり
鬼百合や誰も人の子人の親
唄仲間街へ繰り出す日の盛り

神戸 井関 礼子

石垣の隙間すきまに百合開く
白百合や伏目に御座す弥勒仏
レジ横にいつも白百合ある喫茶
日の盛り静まりかへる保育園
日盛の車列を縫うてバイク便

相模原 町野 広子

水琴のかそけきひびき日の盛り
日盛のドームゆるがすファンファーレ
日盛の少女に侍る盲導犬
風生るる白百合白き水の音
鬼百合やふつと城址に銅臭

明石 田寺 玲子

幾千の百合の整列号砲待つ
クラシック聴かせ育む透かし百合
鬼百合や葉隠れの猫鐘を聴く
内陣に白百合の満つ南無大師
日の盛り内緒話の羅漢さま

神戸 森本 早苗

日の盛り引率教師声からし
日盛りやどか弁分つ校舎裏
焼きとり屋亭主の仕込む日の盛り
マネキンの小指を立てて鹿の子百合
海鳴りや鉄砲百合の向きを変へ

さいたま 松本 光子

大仏に束の線香日の盛り
鬼百合の一茎つんと人を守つ
百合の束抱へて蕊を庇ひ居り
すり傷の砂を蛇口に日の盛り
日盛の区民農園空青し

東京 岡野 順子

日盛りや縁に仮眠の植木職
日盛りやタクシーすでに出払へり
日盛りや誰も詣でぬ辻地蔵
日盛りや空のトロ箱鼻を突く
日盛りを来て映画館内目が慣れず

和歌山 川崎 道子

百合一本足して仏花の華やげり

横浜 白井 由美

山道の山百合今年は見当らず

頭上から追つ手の如し日の盛り

さいたま 池田 雅夫

鬼百合の塊り揺るるビル入口

日盛の街波打つアスファルト
山村のなべて明るし百合の花

日盛りを爆音通過ペン止まる

刈らである山百合の香の田道かな
鬼百合や九十九折なる通学路

日盛りや声無く人影無き校庭

人を恋ひ言葉に飢ゑる日の盛り

深谷 井上 燈女

日盛や厚みの中を抜けて来る

段下に鬼百合の咲く農具小屋
山百合と古墳と対峙令和なり

小川 加藤むら子

日盛や渡舟に黄色の旗上げて

母代りせし姉傭ぶ百合の花
齡重ねなほ先を見る日の盛り

鬼百合の名をもて花はあいらしく
白百合を散らし黒猫振り返る

日盛のせせらぎ癒す露天風呂

日盛りやしシステム障害唐突に

さいたま 丸山マスマ

日盛りやスパイス効きしBランチ

黒金の門扉に隠れ百合の花
累代の苔むす墓に百合の花

さいたま 井口 俊晴

山百合のたわわ画帳を食み出せり

日盛や猫の姿はどこへやら
日盛に前行く女の背筋かな

路線バス笹百合の香を乗せて発つ
五百羅漢の尽きぬおしやべり鹿の子百合

日盛におんぶと抱つこの小さき足

ひめ百合や千尋の海のレクイエム

大和 藤澤 喜久

日盛の学徒動員飯籠ゑる

白百合は自若と雨を諾なへり
紅百合の一朵に満つる自尊心

井上 玲子

さ百合抱き職場去る君嫁ぐてふ

白百合のゆかしき風を貰ひけり
日の盛りふと真空の前頭葉

鹿の子ゆり岨路群れ咲く隠れ里
土間の外眩きばかり日の盛り

日盛りや亡夫に石積む恐山

雨止みて一気に百合の庭となる
白百合や人の別れの呆気なき
鬼百合の匂ひぐらりと山動く
修行者のごとバスを待つ日の盛り
日本が間延びしてゐる日の盛り

久喜 梅澤 佐江

ぼたぼたと水出し珈琲日の盛り
日本一競ふ熊谷日の盛り
日盛の水面に浮かぶ河馬の鼻
日盛や花の迷路の監視台
百合の香をふはりと風の運び来る

熊谷 越田 栄子

日盛や人は土偶に黙の中
日の盛り振子は二時を打ちしまま
日の盛り駅の別れは無言劇
撓むほど艶めき増して百合の花
黒百合や不惑男の侘住ひ

さいたま 渋谷きいち

百合の香に導かれたる心字池
日盛の信号待ちや目と目合ふ
黒百合や車窓に影を残しをり
日盛やわれ置き去りにバス発車
船の灯や百合の花束遠ざかる

川口 野田 静香

柚人も振り鉢巻日の盛り
一類り爪音絶えし日の盛り
日盛や銭湯帰りの下地つ子
予約席カサブランカの香に酔ひぬ
万雷の拍手に揺るる白き百合

高崎 原田 秀子

白百合の無垢なる一花ほぐれそむ
山百合の己が花粉にまみれをり
日盛や商店街は息ひそめ
日盛の催事なき日の檀那寺
日盛の風に炎の匂ひかな

上尾 横山 君夫

白百合や帰還かなはぬ地に盛る
告白につれなき返事鉄砲百合
姫百合や悲劇終はりたる童話
日盛の溪流に浮く釣の笠
寺出でて地獄へ一步日の盛り

さいたま 青木 鶴城

救急車と並んで給油日の盛り
木洩れ日へ微笑み返す白い百合
笹百合や平家の塚に二三輪
生家の庭は今も健在百合の花
父母眠る墓地の近道百合の花

和歌山 西浦千枝子

壇上の主宰百合の花東肩に添ひ
袴付け口上凜と百合の花

さいたま 山田美佐尾

山路来て上向きに咲く透かし百合
将棋打つ周りで弥次を日の盛り
日の盛り準備の店の包丁研ぐ

川口 森川 義子

日盛りのホテルに海の照り返し
日盛りの信号待ちの盲導犬
測量の若人の声日の盛
讃岐路の神の御守護や鹿の子百合
色と香を育てし夫の百合盛ん

さいたま 大場 順子

胸高に山百合かかけ農婦来る
姫百合や眺む少女の鎖骨美し
一茎の百合より明けて水平線
純白の放つ光や婚の百合
日盛の匂ひも配り郵便夫

田中 章嘉

日盛りや研ぎ澄まされし鉋の刃
日盛りの沼に一つの水輪かな
日盛りや合図で動く転車台
病床に明るさ満ちて百合の花
山百合を咲かせて一人悦に入る

俯けどその香たしかに鹿の子百合
山陰に咲きゐる百合の床しさよ
鉄砲百合に天使の姿重ね見む
庭の百合巢立ちし子らと再会す
海や野に輝く少女日の盛り

さいたま 宮崎チアキ

広口の花器に抗ふ百合の花
百合を抱く絵画モデルの立ち姿
色褪せし芝居のポスター日の盛り
取り壊すビルの砂塵や日の盛り
日盛りの拘置所を去る教誨師

大槻 瑤蘭

鬼百合の鬼の影見る月明かり
カサブランカおろおろ探す置き処
老牧師の声柔らかき百合の庭
日盛りを正座で畳む病衣かな
日盛りに去りし人見る白昼夢

松井由紀子

日盛の瓦眩しき蔵屋敷
日盛や黄昏を待つ縄暖簾
山百合の身を乗り出して崖つ縁
白百合は晴れの舞台の主役かな
鬼百合の仰け反るま風に風通る

秋山 紅花

里の道田面眩しき日の盛り
新築の杭打つ音や日の盛り
観光街異国語溢ふる日の盛り
この美しき鉄砲百合に撃たれたい
白百合はやはり小町の化身かも

神戸 上戸千津子

肖像画掲げし部屋に百合香る
山百合や豪雨の去りし村の丘
日盛や下校生徒の列長し
刈込みの枝積み上ぐる日の盛り
少年の口一文字日の盛り

平塚 丸屋 詠子

踏切のなかなか開かぬ日の盛り
日盛りやビルの何処かで赤児泣く
日盛りの小さき影ゆく猫一匹
モノレール下り山百合に迎へらる
廃校の校門前の百合一輪

東京 松山 清子

三時打つからくり時計日の盛り
白百合や閑伽桶に張る水の揺れ
日盛や海まで続く神の燈
姫百合や葉先に光る雨の粒
天秤棒しなる両肩日の盛り

さいたま 田中 泰子

友来る百合の小道を来るらし
百合供ふ遺影の母の髪黒し
日盛や糊をきかせたシート揺れ
山百合の踏ん張つて立つ雨上り
塩飴をなめて夫待つ日の盛

横浜 福田 千春

山百合や長女勝気で雀斑美人
明日咲く百合に声かけ登校す
男坂選りて難儀や日の盛
日の盛り非常階段駆け降りる
剣道の部屋に一輪百合の花

横浜 菅原 知子

白百合の道登り着き慈母観音
野仏を拝む鬼百合風に揺れ
野球部の部屋に百合の白一点
球場にああ応援歌日の盛り
日盛や虚の客賑はひ百貨店

小川 宮崎 雅訓

思はざる処に山百合潮の風
山百合の影をうつしぬ隠沼
日盛のバスを待つ身に陽のシャワー
日盛に全身金の街芸人
日の盛り下校の児等の賑々し

さいたま 後藤 綾子

鉄砲百合白き筒先われに向け
鬼百合の反り身に望む八ヶ岳
鬼百合や検診帰りの道の辺に
日盛や海に湧き立つ雲白し
駐輪場サドルの熱き日の盛り

さいたま 野平美紗子

日盛りやサウナの如き観覧車
地下道を繋ぎつ歩く日の盛り
噎せる程百合の匂へる仏間かな
大輪の百合の投入れ大広間
微睡や百合の香りに包まれて

東京 太田 絹映

日盛や音の遅速のハイヒール
鬼百合や母似をそつとかくしゆく
西武園鉄砲百合に打たれけり
日盛や歴史重ぬる築地塀
府中はや百合の横山横を向く

狭山 矢島 清

百合の香を吸ふやたましひ奮ひ起ち
白百合やノートルダムの焼け落つる
日盛や魚干したる海人の家
蕎麦打つて客に振る舞ふ日の盛
街路樹も人も影なし日の盛

さいたま 染谷 正信

開くまで悩みの多し百合の花
括られて花屋の百合はみな蕾
日盛や一瞬まよふ西ひがし
玄関は百合の匂ひで泣き笑ひ
真つ先にシャワーを浴びる日の盛り

小川 鈴木 みや

洗礼を受けたる友よ百合白し
百合開く放つたらかしの庭の隅
言葉持たぬ百合雄弁に香りけり
日盛やかつて此処にはマーケツト
日盛や人つ子一人居ぬ公園

東京 石川 理恵

ボサノバのリズム好きですスカシユリ
百合供へ夫の遺影に投げキッス
百合の香にむせぶ一人居外は雨
日盛りを来てふくいくと鳩居堂
日盛りの歩幅小さくチンドンや

逗子 中尾 笑子

アトリエの百合は四方に香を放ち
てつぼう百合愚痴は嫌ひと外方向く
山百合やロジの窓に朝が来て
日盛来て極彩色の曼陀羅図
日の盛りしばし茶房でジャズを聴く

さいたま 熊倉千重子

山百合や途切れ途切れに蜂の声

東京 水落 守伊

山百合や谷間にひびくチェンソー

日盛りやトランペットの応援歌
うち枯れし事件現場の百合の束

さいたま 新 暦文

山百合や風に幽かな水の音

日盛りの鳥居を女くぐりゆく

村隔つ要害山に百合眩し

日盛りの列のしんがりカーリイ店
百合の香や薄日のとどく蹀り口

雨の来て俄に匂ふ山の百合

姫百合に色を足しゆく小糠雨

さいたま 水野 興二

山百合の寄する香りに母偲ぶ

日盛りや怒濤の如くバット振る
日盛りや乗合バスのゆらめき来

川 口 田村 節子

雨垂れにそのつど揺るる透し百合

足元に澱む熱気や日の盛り

日盛に猫も大きく欠伸せり

山百合の似合ふ旧家の土の壁

雑草の伸び放題に日の盛り

一輪の山百合の闇里の門

峠越え屋根に山百合咲く湖畔

横浜 川島 典虎

前庭に百合のオブジェや独身寮

笹ゆりの雄蕊を揺らす尾根の風
葉隠れの鳥が顔出す日の盛り

さいたま 塩野 久子

日盛や万引家族を觀賞す

林道の姫ゆりそそと峰仰ぐ
姫ゆりに会へたることを忘れまじ

サーカスの技に息のむ日の盛

倒木に腰を下ろして日の盛り

日の盛り頼む人なき針孔通し

日盛の畑を猿に陣取られ

若狭 飛永 鼓

古民家に二胡の音色や百合開く

雲ひとひら峠の風に百合の花
億年の山路に垂るるゆりの花

秋本カズ子

鉄砲百合石の隙間に繋ぎをり

遮断機の人知れず開く日の盛

百合抱へ二の次にする白い服

木もれ陽に山気とりまく百合の花
風待ちて頭を垂るる山のゆり

日盛やえごで魚捕る昔かな

日盛りや伸び切つてゐる犬の舌
日盛りを路面電車の軋み行く
日の盛り皆んな隠れてしまひけり
山百合やここから先は鎖道
すかし百合ふらり立ち寄る友の家

さいたま 笹本 啓子

パンダ舎の後尾に並ぶ日の盛り
カサブランカ宵のロビーに君臨す
海風の吹き上ぐ崖の透かし百合
日盛やなかなか遠き奥の院
日盛や行き付けの店やめてをり

いすみ 平石 睦子

日盛の深山に響く垂水かな
日の盛り土の匂ひやそと風と
日盛を二人いそいそ暮会所へ
鬼百合が揺るる仔犬の仰ぐ先
懸崖の届かぬ先や鹿の子百合

加藤でん治

カサブランカ活けて仏間の爽やかや
鬼百合や久し振りなる青き空
百合咲けり核兵器ノ一の声響く
亡夫の墓今年の百合も手向けたり
日盛りや無沙汰の友に手紙書く

栃木 佐々木典子

少しづつ紅さす蕾百合の午後
数ふれば蕾十五の百合長けて
ゆるゆると花を切り取る日の盛り
旅靴かかへ胸急く日の盛り
山百合や「驛」の字使ふ五番線

山口 韶子

日盛の杖がころがる一里塚
日盛の子供吸ひ込む恐竜展
日盛の闕伽桶こぼす車椅子
人寄せぬ崖の白百合顔上げよ
八年の寝た切り終はり百合の喪

横浜 山岸 弘子

日盛に背筋伸して卒寿かな
日盛や甕の柄杓は現代物
日の盛り買物どつさり後籠
百合の香や高原散歩二人連れ
日盛や三人乗せてペダルこぐ

和歌山 南條きわゑ

十分で活くる白百合研究会
主役とて舟形花器に百合一本
研究生のプレゼン見事白き百合
白百合やハミングで描く七つ星
電鋸の工事の火花日の盛り

和歌山 葛城千世子

立ち上り立ち上りつつ百合の花
鬼百合や玄関に香まき散らす

さいたま 伊藤 愛子

曾孫まごの名を令子と名づけ日の盛り
お三方の師の忌を修す日の盛り
災事あり目もくらみけり日の盛り

村人の愛に包まれ山の百合
ひと口の紅茶に安気山の百合
ボランティアへ山百合の香をかき分けて
山百合や愛のひかりを総身に
日盛りの空をつんざく間歌泉

さいたま 福田 育子

汽笛二度山百合覗くトンネルに
笹百合に包まれ大和一宮

伊子 向井 章子

何処から鬼百合庭に堂々と
賜りしカサブランカを供花とせり
当てもなく大橋渡る日の盛り

黒百合や堂々めぐりの蓄音機
百合開く白波五人男かな
只今は男子禁制百合にほふ
日盛や客足とだえ微睡みぬ
日の盛りメニューにカレーなかりけり

和歌山 高橋満耶子

日盛りや男おしやれな傘さして
病院より一步ふみ出す日の盛り
水替へて百合の標をもらひけり
百合の香のひとりに余る仏間かな
お別れは百合百本にかこまれて

さいたま 高橋 敏子

白百合のさゆらぎ庭に暮色来る
民宿の黒百合愁ひ覗かせる
夜の白百合清く耀らひ座するなり
日盛の菜園の土黒々と
日の盛り考へもなく草を刈る

熊谷 神田 治江

百合の香の満つるロビーに人を待つ
百合の蕊よけて花屋に入りけり
晩学に白百合の白日日新た
むき出しの腕に土産日の盛り
日盛や車道横切る野良の猫

山口 富子

白百合を抱へて君の誕生日
白百合のコサージュそつと君を待つ
日盛の野菜畑のしんとして
日盛の海に漂ふ親子連れ
冷やすもの釣瓶に入るる日の盛り

さいたま 梅澤 輝翠

黒百合の花に会ひたし山の道

さいたま 竹澤 和子

雨後の百合一輪すくと立ちつくす
軒下に帽子と靴や日の盛り

リフト揺れ山百合大きく揺れはじむ
川舟のぎいつと回り百合の花
断崖の山百合身投げするやうに

さいたま 森 和子

日盛りの茶室にひびく着信音
菜園に虫が飛びかふ日の盛り

日盛や檻のゴリラは手を見つむ
日盛の列なす小さきラーメン屋

ひめさゆり探しつつゆく尾根の道

西幅 公子

日盛の緊張包むヘルメット

下川 光子

咲き充つる百合に青春もらひけり
草引く背ぢりぢりと焼け日の盛り

日盛や円柱著き国府跡
鯪を堀放ちたし日の盛り

白馬岳の岩場の窪みくるまゆり
地べたの犬舌伸び切るや日の盛り

百合咲くやビジネススーツ似合ふ女子
見つめゐて鉄砲百合に咽びけり

玄関の一際明し白の百合

草 加 河野はるみ

日盛に白杖の音こつこつと

白田 みち

近づきて向きを反へたる百合を買ひ
にこにこ釣果は背の籠の百合

日の盛りけばき化粧の女往く
日の盛り待ち人来たらず時計台
山百合を手折ればふいに幼き日

寺石段斯くても行かむ日の盛り
日盛や投票場の静かなり

笹百合の香によみがへる想ひ人

百合の香の咽せるほどなり卓の上

さいたま 高原 和子

日盛りの瀬に遊ぶ鳥うらやまし
退院にカサブランカか蕾とく

杉 戸 佐々木史女

号令をかけたるごとし鉄砲百合
卓上の白百合そつぽ向きにけり

日盛の釣堀の水淀みをり
日盛の三十五度のカラオケ屋

日盛やバイクの僧が走り去る
日盛の公園水を飲む鴉

山籠のそば屋の庭のすかし百合

息吸ひて息をはくかな日の盛り
日の盛り犬ころのもう歩かない
峠道あかりのごとく百合さけり
山の唄ささやくやうに百合の花
あなた向く千の山百合丘の上

所 沢 関根 千恵

鉄砲百合小学生の平目筋
庭中に百合を咲かせて母元氣
山百合のおいでおいでと生家かな
日の盛防災放送たづね人

蕨 細井 良子

日盛の新都心駅陰もなし
鹿の子百合君の誘ひにや乗らないよ
奥入瀬の橋の袂に百合一輪
日の盛迷子を告ぐる拡声器

さいたま 飯田 忠男

日盛に雲美しく友が来る
匂ふほど百合開きたる仏間かな
百合咲きて出羽の山々開きたる
日盛に西を背にして観音堂

さいたま 新井 孝磨

日盛にドローン浮かぶ河川敷

大阪 飯塚智恵子

日盛のサドル焼きつき仁王立ち

小川 洋子

たこ焼のミイラになりて日の盛
日の盛郵便バイクの音だけ
大淀の川底あらは日の盛
黒雲や一気暗転日の盛

百合開花花粉集めて香り抜き
日盛やラッシュユアワーの水広場

町 田 瀬戸雄二郎

鹿の子百合主なき庭の守り神
今風に男女相よる日の盛り

山百合のつんと澄まして香をはなつ

東 京 石田 慶子

白百合や首細き娘の合唱かな

小 浜 松島 寛久

また今年百合を抱きて君の来る
百合包む花屋のロゴの大きけり
日の盛りポストに届く督促状

日盛の潮騒舳へ珠と散る
若僧の甲高き経日の盛り
背負子に山百合揺るる山居かな

垂るほどに百合の花咲く屋敷跡

東京 河原 叔子

一茎に天使舞ふかの百合ひらく

葯取らば点晴を欠く百合の花

さいたま 反町

百合活けつ戻らぬ過去の事しきり

日の盛高校球児熱闘す

日盛に癒し求めてカフエテラス

玄関に犬寄り付かず百合の花

日の盛甲羅干しせる河童たち

軒下に猫一休み日の盛

宮代 関谷多美子

晩年の父歎びし庭の百合

山百合の褪せぬ思ひ出里の山

若狭 岡本 祥子

馥郁と香る白百合灯を消せば

ゆめを追ふ高きハードル鹿の子百合

林道をゆつくり上る日の盛

日盛の休耕地踏む農夫かな

少年の日盛駆けるバイク音

盛り花の主役を競ふ百合三枝

さいたま 川村 浩

早よ帰れこの日の盛りベビーカー

山百合をどつさりおごる祖父の里

鬼石 榊原 聰子

天と地と競ひ合ふごと日の盛り

百合ひらき家族写真をかくしたり

茶を点し袂の風に百合の香を

白百合の葉にトレモロの滴あり

亡き義父の想ひ出つれてかのこ百合

日盛へ人を吐き出す映画館

山下ユリ子

日盛や傘をのせたき六地藏

下校する赤白帽子日の盛り

さいたま 千坂 平通

奥山にひそみて百合の花白し

風を切るセーラー服や百合白し

山百合の咲きたる崖や空青し

白百合が白装束の母飾る

祝のブーケに白百合香も添へて

東京 鈴木 和子

日の盛りたつぷり水を父母の墓

日盛や頭上に黒き訓練機

東京 飯室 夏江

日盛や十秒を切る記録出づ

日盛や「縁切榎」の影が炎ゆ

ラグビー選手の腿たくましく日の盛り

古民家の土間に設ふ百合白し

出迎へは最高地点の駅の百合

百合の香に誘ひ込まれて藪の奥
受付に秘書と相俟つ百合の花
日盛の沖で万歳赤ふどし
日盛や妻の買物塩煎餅

さいたま

安倍 弘夫

日盛やさても思案のへば料理
老いらくの恋かもしれず白き百合
旅終へて笹百合香る書斎かな
おかつばの少女のペロや日の盛り

若狭 檜鼻ことは

湿原の大姥百合よ凜と立つ
ピザ窯や山百合香る別荘地
黒百合の網目艶めく恋模様
福島のを清めし姫小百合

春日部

諏訪サヨ子

白百合や舞ひてきりりと白拍子
伽藍見下ろす山百合は微雨のなか
パラシュートのごとく鬼百合をちこちに
溶岩に立つ黒き顔日の盛り

川崎 鈴木 玲子

少女持つ百合の香充つる山手線
朽ちさうなマリアの像に白き百合
透かし百合群るる丘から海のぞむ
山百合の花粉を袖に山登る

湯浅 和

喪の家や玄関までも匂ふ百合
鬼ゆりや杖つく吾を嘲笑ふ
日の盛り街中眠るカンボジア
日盛りや薄目の孔雀死んだふり

藤沢 小島喜代子

小雨降る鎌倉山の百合揺るる
白百合に囲まれ永遠の別れなり
植木屋の音のみ聞こゆ日の盛り
日盛りや目だけ出したる帽子行く

森下美智枝

父卒寿山百合一本雄雄しけり
山百合や人知れず咲き風に揺れ
日盛の熱き遊説人まばら
日盛に野菜の育つ早さかな

さいたま 長井喜代子

魅せられしカサブランカに歓声す
白百合や文武を競ふセーラー服
山百合の香に寄せられつ深呼吸
日盛に仏壇の水替へる次男

落合 和枝

山百合や山が舞台の役者なり
白百合や歩く少女の足細し
日盛や満面笑みの寄席の客
日盛や行く路々のひつそり閑

武田 重子

一年生日盛り帰りビルの風

さいたま 上野 宜子

日盛のさなか浮世絵展示室

深山のまたその奥に赤き百合

さいたま 藤岡真知子

青天や林道までの透かし百合

山百合に思ひ思ひの憂ひかな
釣糸を垂らす日盛りゴム草履

響きから鉄砲百合を嫌ふ老翁

百合の花香りを高く庭のすみ

内田 雅代

慰霊祭百合の季節に訪ひて

東京 柳父 はる

日盛りに激辛カレー見栄男

日盛りや大会近き運動部
百合の花部屋中香り落ち着かず

真上から影許さじと日の盛り

日盛りに憩ふ父との最期の日

綿貫ひさの

日の盛り人手消えたる商店街

俯いたままの鬼百合地藏堂

ゲレンデの百合の花園村起し

さいたま 野村 美子

雨に濡れ庭の鬼百合うつむきて

讃美歌のパイプオルガン百合ゆらす

草加 外村 紀子

山道の百合の白さに足を止め

手向けたる百合の白さや一周忌

日盛や伏見稲荷の狐面

風になびく岬一面百合の花

鉄砲百合夜半にひらく気配かな

和歌山 宮井美恵子

山百合の人待ち顔や峠道

日の盛り時を惜しんで海潜る

越谷 阿部 幸代

近道は「通行止」に日の盛り

大の字に親子で寝入る日の盛り
引き売りの声が近づく日の盛り

日盛の身を委ねたる救急車

山百合や参道暗き社の灯

壇上の白百合けふの主役喰ふ

吉川 杉浦 理恵

白卓布ゆりの花粉のあざやかに

日の盛り庭の時間の止まりをり
鬼百合に出迎えられし山の宿

川崎 板子由美子

小石踏み幼泣きべそ日の盛り

百合の香の満ち満ちてゐる母の部屋

日盛りの街はただ今昼寝中
むせるほどに誰を誘ふか山の百合
廃屋の窓のぞき込む百合の花

さいたま 菅原 真理

百合の香は山の迷ひの道しるべ
濃き化粧に一步身を引き百合の花
百合の香に他の花の匂ひ吸ひ取られ

三郷 沼尾 岳

音たてて糠床手入れ日の盛り
孫の手も借りて田仕事日の盛り
日盛やドクターヘリの影遠く

和歌山 嶋田 洋子

岩棚を百合香纏うてクライマー
百合の香が釣れぬ釣師の憂さ晴らす
黒百合を保護する園や八ヶ岳

小川 藤間 友二

日盛りの大道闊歩あまのじやく
山路来て安堵ひととき百合の花
日盛りや露座の大仏大あくび

さいたま 佐藤 克之

里山にあまた山百合ひらきしや
日盛りや雨上がりの水ゆらめいて
日盛りや鉄柵熱き船着場

小山 敦子

☆

☆

日盛りや銀座に群るる異邦人
日盛りの浜辺を走る中学生
鬼百合に昂然の気を貰ひけり

鈴木 藻好

日の盛り銀髪なびかせマラソンす
闇夜では香りが先に白き百合
廃屋に真白き百合の群れてをり

東京 畑宮 栄子

夏季競詠

山本 鬼之介

作品評

ヴィオロンや百合の邸の窓辺から

網野 月を

夏季競詠の目的と意義

毎年十月号は、全会員による夏季競詠を実施していますが、その目的と意義を理解していない会員が多いように感じます。そこで、各位の出句意欲を高める為にも、その目的と意義を明らかにしたいとの思いから筆を取りました。

〔目的〕競詠は、「大相撲トーナメント」と同様に、「兼題」を「土俵」に見立て、全会員が同じ条件で俳句を競い合う場、即ち年に一度の「水明場所」なのです。廻しを確りと締め、「水明集」会員と「季音」会員とが四つに組んで互いによつかりあってくれることを望んでいます。水明集の作家が、季音雪欄の作家を凌ぐ「金星」を挙げるような傑作が生まれることを期待しています。

〔意義〕通常の雑詠作品では比較しにくい技量の差を、兼題で条件を統一することによって見出し易くなり、全会員が一堂に会して俳句を楽しむことが出来ます。また、夏季競詠での成績が、水明賞・季音賞の選考課程において、巻頭に加えての重要な評価要素になります。

violonというフランス語の表記に拘った俳句にぞっこん惚れこんでしまった。violinでは、「百合の邸の窓辺から」が生きてこない。たった一字の違いであるが、これが百合を沢山咲かせている邸宅の濃密な雰囲気を不動のものにしている。また、「窓辺から」でヴィオロンを弾いている人物像が想像できる。どこか謎めいた印象が漂う三〇歳前後の女性である。難しいフランス語の発音も、作者なら容易であろう。

日盛の骨董市の鉄兜

内田 恵子

兼題の季語「日盛」を物の見事に活かした俳句である。余計な事柄を一切排除し、「骨董市」という場所と「鉄兜」という物に焦点を絞った明解さが素晴らしい。鉄兜と言うからには、戦国武将が被った兜ではなく、多分旧帝国陸軍の将兵が用いた鉄兜であろう。骨董と言える代物にはほど遠く、何時も露店の隅に転がされている物だろうが、弾痕でもあれば、その内好事家の眼にとまるかも知れない。毎月第四土曜日に開催されている調（つきのみや）公園の浦和宿ふるさと

市での作者の興味深げな眼を感じる一句である。

舟縁の蛸ひつばがす日の盛 矢作 水尾

海に関係する題材を詠むの得意とする作者ならではの作品である。小舟で蛸釣りをしているのか、或いは、蛸が入っている蛸壺を引き上げているのか、何れにしろ捕獲された蛸が逃げだそうと八本の腕を使って藻掻いている様子が、刻々と伝わってくる臨場感の溢れる俳句である。「ひつばがす」が実に良い。

黒百合の嶺にらんらんと夜明星 服部みどり

「黒百合は恋の花」で始まる織井茂子の「黒百合の歌」に結び付く傑作である。この曲は、筆者の中学三年生の年に当たる昭和二十八年に、一世を風靡した松竹映画「君の名は」の主題歌として発表されたもので、まさに超懐メロである。歌好きの作者もきつと愛唱していたに違いない。

暗紫色の無気味な黒百合の咲く場所として、山の嶺がびつたりだし、「らんらんと夜明星」が、黒百合の存在感を絶対的にしている。まだまだの現役作家を証明した俳句である。

壺ばかり焼きし窯出し日の盛り 山中 順子

壺に執着している陶芸家なのか、数日間つきつきりで登り

窯の火を守り、やっと窯出しの時を迎えた。さて作品の出来映えや如何に。窯の火に灼けた肌に、真夏の午後の陽射しが容赦なく照りつける。乱れた髪に髭もじゃの気むずかし気な陶芸作家の姿が浮かんでくる。

日盛りや食物連鎖小休止 正木 萬蝶

「食物連鎖」という科学用語を巧みに用いたことに感心した。慣用語の「食うか食われるか」や「弱肉強食」をセツトにして鑑賞するとすんなり理解出来る。動物界の生き物間では日常茶飯事に食物連鎖が行われているが、人間界においては、経済面や対人関係の面での食物連鎖が行われている。それら止めようのない仕組みが一時的ストップすると言うのだから面白い。「日盛」という万物の神による一時休戦である。

一印で消えし父祖の田百合の花 大橋 迪代

昔の事例として、連帯保証人の判を押したばかりに、父祖伝来の田畑を失ったという悲惨な話を耳にしたことがあるが、この句の内容は如何なるものか。他家の同様の事例を客観的に詠んだものか、或いは、作者の縁者が田圃を不動産業者に売却した時の契約印のことなのか、何れにしろ、田が他人のものになった淋しさが、気品ある百合の花に表れている。

高塚の草の打ち臥す日の盛 五明 昇

墳丘にある古墳を「高塚」と、響きの佳い言葉で表したのが良い。「草の打ち臥す」で、宮内庁が管轄管理しているような陵墓ではなく、大昔の地方豪族の古墳のような気がする。往時の栄華のあとも見えず、自然のままの墳墓であろうか。強烈な陽射しが、容赦なく照りつけている。

熔接の火花が奔る日の盛り 境 延昭

町工場が工事現場で作業中の熔接の火花であろう。作業工夫の顔や露出した肌から噴出する汗までもが眼に飛び込んでくる臨場感満点の俳句である。

百合の香に眠れば夢に母が来る 十倉 和子

寝室に活かれている百合。本数は少なく、それほど強い匂いではない。睡眠導入剤のような効果があるかも知れない。久し振りに夢に母が現れ、甘えさせてくれた。

大道芸を見る人ひとり日の盛 加藤草太郎

暑さで茹だっている日盛りの街中で、黙々と演技しているパフォーマー。通りがかりの人々が立ち止まって観るような余裕の無い日盛りである。酔狂な男が一人居た。

日盛りや村に信号ひとつだけ 高島 寛治

今時こんな長閑な処があるのかと思えるほど、平和な村である。村内のメイン通りに一箇所だけ信号機があるが、あまり役目を果たしているようには思えない。警察沙汰の事件も無く、駐在さんも暇を持て余す毎日である。

紅百合よそつと囁く京言葉 大村 節代

句意を明確に汲み取ることが出来ないが、筆者には魅力のある俳句である。解釈のその一は、紅百合が京言葉で作者に囁いてきた。その二は、紅百合に対して作者が京言葉で囁きかけた。ということであるが、第三第四の解釈があるのだろうか。紅百合につづく「よ」から推考して、その二であろうとの答えに落ち着いた。さて、どんな言葉を掛けたのか。

日盛のホースで洗ふ象の皺 大塚 茂子

日盛りに象を洗う動物園の飼育員の作業風景を詠んだ俳句と思われるが、あの特徴のある象の肌を、「象の皺」と端的に表現したことで、切れの良い俳句になった。俳句学習の成果が現れた名作と認めた。

日盛りの輸出車玩具めく埠頭 吉澤 純枝

輸出規制で対米との問題を抱えている我が国の現状を鑑み

ると、この俳句が新鮮に思えてくる。大型貨物船に積み込まれる車が整然と並んでいる埠頭を俯瞰すると、丁度この句のような光景になる。覆うものが全く無く、直射日光をまともに受ける自動車 reality が実に痛々しい。

白百合やオルガン響く天主堂 近藤 徹平

江戸時代の隠れ切支丹にも由来する天主堂は、現存する最古の教会として国宝になり、また、ユネスコ世界文化遺産登録に重要な役割を持つ長崎市の大浦天主堂に代表されるが、他にも佐世保市の黒島天主堂、五島市の江上天主堂など、九州地区には天主堂や教会堂と呼称される建物が多い。掲句の天主堂を特定するのは難しいが、俳句の持つ雰囲気として、こぢんまりした天主堂が好ましい。白百合が天主堂の外に咲いているものか、中に活けてあるものかによって鑑賞の仕方が違ってくるが、白百合の姿とオルガンの音色が情緒を磐石にしている。

裸婦像の水乞ふポーズ日の盛 柚木 治子

最初からこのようなポーズで製作された裸婦像ではなからうが、厳しい陽射しの中を歩いてきた作者の眼には、あたかも裸婦像が水乞いしているように見えたのかも知れない。白色の裸婦像に対比して、情景の中に公園の緑が見えてくる。

ダム底に橋現るる日の盛 田中 千穂

早続きでダム湖の貯水量が危険水位を割り、ダム建設で湖底に沈んだ村の建物が露出してきた。大変な事態となったが、大自然の力には為す術もなく、行政府もお手上げ状態である。以前実際にあったことで、天候異変が続いている近年の様子から見て、このような事態が何時起こるか分からない深刻な俳句である。

降りてゆくりフトに触るる山の百合 石井 喜恵

麓にある基地と山の頂を上下するリフトで、少々スリルがある。足下に樹林や草地もあり、時には掲句のような花すれすれに通過することもあるだろう。開放感が快い。

笹百合の広がる女人堂辺り 永野 史代

「女人堂」とは、女人の参詣を禁じた寺院で、特に女性のために特設した堂舎で、高野山の女人堂が有名。笹百合の群生する場所を「辺り」と暈したところに妙味がある。

日盛やあの娘の睫毛はづれさう 由良ゆら女

折角の付け睫毛が、汗で緩んだのか今にも外れそうになっている。心配しているようでもあり、意地悪ところを出しているようでもあり、女性心理の複雑さが窺える。

雄叫びはワイアーレッズ日の盛り

西山貴美子

J1「浦和レッズ」の応援風景か。今年は成績がふるわず、十位以下に低迷。J2入りになる可能性もあり、地元ファンの応援が更にヒートアップする。

百合買うてモデルのやうに歩きけり

星野 和葉

花屋で買いた求めた百合の花束を抱えて颯爽と街を歩く。他の花とは違う雰囲気が生まれて気取った歩き方になった作者。「買うて」の「ウ音便」が一句を滑らかにしている。

四阿に富士と対峙す日の盛

鈴木 康世

「富士の康世」と言われるくらい富士山に接する機会の多い作者。日盛りの最中に四阿に居て、夏富士の優美な姿を愛でている作者が実に優雅であり、その余裕が羨ましい。

山百合の雨に伏したる杣の径

石山かつ子

山に自生している百合の強さを凌ぐ勢いの山の雨。打ちひしがれた山百合ではあるが、雨が上がって陽が射してくると元に戻る花の強さを感じる。「杣の径」が効果を為している。

百合香る約束果たす受賞の笑み

小倉 倭子

思わぬ病に臥した句友。約束通り全国大会に出席して受賞を祝う百合の花束を確りと抱いた。受賞を言祝ぐ文章を執筆した作者にとっては、この上ない喜びであつたらう。

日盛りに音消して行く救急車

山中みどり

急患者を病院に搬送して消防署へ戻る救急車。病院へ急行する時とはがらりと様子が違い、法定速度を守って走る。日盛りのいらいら感とは対照的な静謐感が伝わってくる。

ビードロの声出す鳥や日の盛り

栢尾さく子

ガラスを引っ掻いた時に発するあの嫌な音のような鳴き声を発する鳥なのであろう。日盛りの苛々感に輪をかけたような鳴き声に一層不快感が増幅する。居た堪れない夏の午後。

揺り籠を置く静謐や日の盛り

菊池ひろこ

揺籃の置かれている景が醸し出す聴覚的な静と心証的な静。日盛りと相俟って「静謐」という表現になった。

バスを待つ黒衣の庵主日の盛り

荒井 俱子

墨染の衣の尼法師が肅然とバスを待っている。「心頭滅却すれば……」の無念無想の境地にいるような泰然とした姿。

水琴窟

(水明集八月号鑑賞)

池田 雅夫

茅葺の消火訓練虹の帯

高橋満耶子

茅葺の家は、夏は涼しく冬暖かい特性を持つが、その手入れ、維持が難しくなってきた。茅葺屋根で思い浮かべるのが白川郷の合掌造りの家。その防災訓練の映像をテレビで見ることがある。各棟一斉に放水され幻想的であった。

挨拶の弾む木道夏山へ

秋山 紅花

夏山の醍醐味は、雄大な自然に触れ、その周辺にある草花の觀賞もその一つである。整備された木道で出合う人たちの爽やかな挨拶はとても気持ちよいものである。靴の音や鳥の声が聞こえてくるようだ。下五を「夏山」で完結したい。

加須の空に夢をも喰らふ鯉幟

福田 育子

埼玉県加須市の鯉幟は日本一の大きさを誇る。およそ百メートルもある「ジャンボ鯉幟」が揚げられる。その大きな口へは大量の風とともに子供らの夢をも呑み込んでいるというのだ。文字どおり大きな句になった。縁起のいい句である。

目薬のあとのまたたき初夏の風

高橋 敏子

目薬を点すときの清涼感を詠んでいる。その着目に感服した。点眼のあと、まばたきをして目になじませる。その冷たさ清涼感を「初夏の風」と表現している。「またたき」「まばたき」は漢字では「瞬き」と同じだが、使い分けている。

少女らの白き二の腕薄暑光

田中 泰子

それまで長袖の洋服であったが、初夏となり惜しげなく二の腕を出す半袖の洋服なのだろう。少女らの眩しい二の腕に目を奪われている。「白き二の腕」に少女らの純情さが鮮明な映像となる。「薄暑光」に至るまでの推敲が窺える。

沼辺より瑠璃色の雨かな女の忌

関根 千恵

さいたま市別所沼にはかな女の句碑がある。九月の「かな女忌(りんどう忌)」にさきがけて詠まれている。降りしきる雨が、沼のほとりに建つかな女句碑を洗うかに思えたのだろう。「瑠璃色」にかな女への敬愛の念が表われている。

母の日やあなたの息子で有り難し

松島 寛久

わが国の「母の日」の歴史は古く、大正二年以来日本キリスト教会を中心に広がってきた。母に対する尊敬の念を、この上ない言葉で詠んでいる。「有難き」で別な意味合いも。

草木をうるほす雨や夏来る

高原 和子

春の雨は草木にとつて芽吹きのためのものだろう。それに對して夏の雨は、陽を浴び草木の成長を促すものと言える。木々の眩しいほどの反射光やさわかさが詠われる「立夏」であるが、本句は雨に注目している新鮮さがある。

朝焼の染むるレンガの東京駅

飯室 夏江

数年前に改装された東京駅。当初のように赤レンガの美しい景観が話題になった。朝焼の茜色に染まり一層鮮やかなレンガの色であった。「染むる」を「しむる」と読むと、朝焼の色が一段と強く感じられ、見ている角度も微妙に異なる。

トンネルを抜けて眼下に初夏の海

岡本 祥子

このトンネルは、JR小浜線のものか丹後街道のものか。あるいは一般道路の隧道かも知れない。若狭国定公園のこのあたり、暗いトンネルを抜け一気に青い海の明るさに転ずるコントラストがみごとに詠まれている。若狭もいよいよ夏。

補聴器の夫に轉り数多なり

榊原 聰子

深い思い遣りの句に感銘をうけた。普段から欠かせない補聴器は必ずしも正常に聞こえるとは限らない。しかし、今日は鳥の声が夫の耳にとどき、その悦びを素直に詠んでいる。

風光る湾にはためく大漁旗

湯浅 和

「風光る」は感覚的な季語である。桜鯛や真鳥賊などが句である。大漁旗を揚げて帰港する船の活気を熱く詠んでいる。大漁旗のたなびく様子が「風光る」に呼応して、艶やかな漁師の顔を連想させる。はつきりと情景が見える句である。

たけくらべするや背伸びのねぎ坊主

杉浦 理恵

「たけくらべするや」で、切れの効果を生かしている。列をなして植えられた葱の葉の間から花茎がまっすぐに伸び、頂に細かな花をつける。葱坊主の観察も充分なされているようだ。擬人法を駆使した工夫が成功している。

山間の鳥に呼びかけ草の笛

阿部 幸代

草笛と鳥の啼き声の周波数が近いのだろう。山村に育った者は、鳥の声をまねて口笛を吹いたり、声色を工夫したりして楽しんだものだ。鳥と会話ができたならばらしいことである。そもそも草笛を鳴らすこと自体難しいことであるが。

乳母車押す手にそつと新樹光

菅原 真理

初夏のさわやかな日に公園デビューでもされたのだろう。乳幼児には直射日光を避けたい。それでも外の空気には触れさせたいという母心が「そつと」ににじみ出ている。

鼓

笛

集

山中順子選



海霧の沖望む岬のカフェテラス
アート田のラガーくつきり行田の夏
雑草と格闘の日々盆用意

森下美智枝

暁鐘に睡蓮開く秘仏寺
作務衣と十葉軒に尼の寺
念仏婆一生に悔なし彼岸寺

松島 寛久

ゆるやかに闇へ切りゆく初螢
撒水栓真夏の芝へ全開す
盆の月父の遺愛の庭の椅子

横山 君夫

撒水の弧を抜け自在夏の蝶
二杯目のコーヒー庭に夏の蝶
訃報受け消すマニキュアや夜の秋

山口 韶子

「国華」なる三溪の書や秋ともし
秋耕に讚美歌捧ぐ修道士
地に頭突きでんぐり返る秋の空

大槻 瑛蘭

山百合や風を頼りに一人旅
蛸や待合室の長き列
大西日仙台平野穂波打つ

加藤でん治

風の湖水面に月や夜の秋
さきたまに土偶百体合歡の花
汲み上げる釣瓶のうれし水瓜かな

大塚 茂子

夕立止み道路むんむん匂ひ立つ
蟬しぐれ千本鳥居を抜けてより
抽出しに集めし宝蟬の殻

森 和子

清めらる朝の公園つくつくし
いくたびも目薬をさす文月かな
新涼やタイル磨きつ作句する

捕虫網鋭く曲る鬼やんま
列車過ぎ深さ増しゆく虫の闇
身に入むやポリールプ切除の歳制限

つまづけば秋暑のこもるエレベーター
夏帽子壁に色褪せ杖重し
七夕竹老いの願ひは平和のみ

お盆月人生百年余裕有り
郷の秋愛着強しいつか又
忘れじの君は何処か秋の風

夕野分義兄と別れの白木輿
スナツクの扉抱くかに涙万年青
大原女や紫蘇のジュースを三千院

透き通る空気が描く初秋かな
道の駅名物気取りのところてん
梅雨明けて洗濯機から吐息洩れ

宮崎チアキ

水落 守伊

山岸 弘子

落合 和枝

梅澤 輝翠

松島 勲

鼓笛集作品評

山中 順子

海霧の沖望む岬のカフェテラス

森下美智枝

「じり」は北海道の方言が定着したといわれているが、俳人であればこそ「じり」と詠むことが出来る。この句の一番は遠く望む海霧から自らの置かれている位置が明確であること。夏から秋へやがて季節の移動も岬のカフェテラスが作るグラデーシヨンゾーンである。

ゆるやかに闇へ切りゆく初蛍

横山 君夫

虫の部類であるが鳴かない。しかし明滅しながら飛ぶ雄に草むらから雌が光を返す求愛行動である。短い夏を生きる小さな命は「切りゆく」の措辞が涙ぐましい蛍の哀切が伝わってくる。自然界は迷である。

私の好きな一句（自句自解）

青木 鶴城

遺伝子の繋ぐ賑はひ夏座敷

この夏、いとこが集まった。八名いた父の兄弟姉妹の
全てが故人となつてしまつた今、各々の親の遺影を持つ
て集まれといとこ会々長の号令。初めての顔も有つたが、
間違いなく同じ遺伝子の匂いがした。

鼓笛集の書き方

- 俳句は四行目から上を開けずにお書き下さい。
- 二百字詰原稿用紙をお使い下さい。

編集部

俳句

10月号
予告

9月25日発売
予価(本体920円+税)

特別作品 矢島渚男・大串章・山口昭男

名句の「切れ」に学ぶ 作句法

大特集

- ▼総論「切れ」とは何か?……山西雅子
- ▼名句の「切れ」に学ぶ
- ▼読み手によって句の解釈が変わる「切れ」
- ▼実作! 「切れすぎ」と推敲のポイント

3号連続新作短編掲載!

ほんほん彩句(2)……宮部みゆき

俳句クロニクル(前編)……友岡子郷

全員もらえるトートバッグつき!

定期購読キャンペーン中

対象:2019年9月30日までの入金詳しくは俳句本誌またはHPをご覧ください。

電子版同時発売!

電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA 0570-002-301(ナビダイヤル) <https://www.kadokawa.co.jp/>

水明の記事掲載他誌より転載

『野火』(9月号)

俳・句・月・評

森村 和弘

しだれざくらお城の庭の野点傘

波多野寿子

「水明」六月号「季音雪」より。

用言を一切用いず、ものを置いただけの絵画的な句である。静的で色彩豊かな景が想起される。しだれざくらのピンク、石垣の黒、城壁の白、緋毛氈の赤といった具合に。そこで肅々と野点が営まれる風景は、異次元的な感がある。季語の平仮名表記は長々と垂れているしだれざくらの様を表している。また近景と遠景を配することで立体的な構図となっている。

☆

☆

特集

秋の俳句類句類想脱出法!

巻頭作品10句

秋尾 敏・天野小石・太田土男
岡崎桂子・小澤 實・澤井洋子
嶋田麻紀・岸原清行

俳壇

10月号

9月14日発売
定価800円(税込)

巻頭エッセイ
上野一孝

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句II……宮坂静生・柴田佐知子

俳壇史エピソード……坂口昌弘

連載 続・日本の樹木……広渡敬雄

俳句における「写生」の周辺……栗林 浩

近代女性俳人伝……坂本宮尾

特別寄稿 阿波野青畝小論……井越芳子

俳壇時評……松下カロ／俳壇月評……しなだしん

俳句と随想12か月 はりまだいすけ・江崎紀和子

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話 03(3294)7068 振替00100-5-164430

季音抄 鬼之介

大仏ののしかかりくる残暑かな
 遠雷やゆつくりと抱く山の昏
 電気ブランの氷片くらり夏終る
 敗戦日征きて帰らずかの指輪
 飛魚とべり鑑真の海かきわけて
 遠花火途中で割れたコルク栓
 須磨琴の連弾を聴くたかむしろ
 大文字崩れて賀茂の水明り
 盆の月み霊迎への薄化粧
 かはほりや山雀られし辺りより
 夏の果胸に擦り傷想ひ傷
 紅芙蓉天衣に似たる雲一条
 絶筆の友の玉章白桔梗
 鑑真の海穏やかに飛魚渡る
 古稀を過ぎ漸く似合ふ白上布
 甲斐袖軽く着こなし秋初め
 りんだうに風の集まる切通し
 紫陽花や一雨ごとに句碑の貌

矢作 水尾
 山中 順子
 山中みどり
 由良ゆら女
 吉住 光弥
 網野 月を
 田寺 玲子
 吉澤 純枝
 十倉 和子
 森田 祥絵
 小倉 倭子
 柚木 治子
 森川 義子
 大場 順子
 田中 千穂
 山田美佐尾
 梅澤 佐江
 松宮 保人

次の原稿を募ります。随時発行
 所宛、ふるってお寄せください。
 なお掲載については、編集部にお
 任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽
 に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
 (句に雑誌名、句集名、刊行月
 を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起
 きた面白い話題、めずらしい経験
 などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
 (題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

夏季競詠抄 鬼之介

ヴイオロンや百合の邸の窓辺から
 日盛の骨董市の鉄兜
 舟縁の蛸ひつばがす日の盛
 黒百合の嶺にらんらんと夜明星
 壺ばかり焼きし窯出し日の盛り
 日盛りや食物連鎖小休止
 一印で消えし父祖の田百合の花
 高塚の草の打ち臥す日の盛
 熔接の火花が奔る日の盛り
 百合の香に眠れば夢に母が来る
 大道芸を見る人ひとり日の盛
 日盛りや村に信号ひとつだけ
 紅百合よそつと囁く京言葉
 日盛のホースで洗ふ象の皺
 日盛りの輸出車玩具めく埠頭
 白百合やオルガン響く天主堂
 裸婦像の水乞ふポーズ日の盛
 ダム底に橋現るる日の盛

網野 月を
 内田 恵子
 矢作 水尾
 服部みどり
 山中 順子
 正木 萬蝶
 大橋 廼代
 五明 昇
 境 延昭
 十倉 和子
 加藤草太郎
 高島 寛治
 大村 節代
 大塚 茂子
 吉澤 純枝
 近藤 徹平
 柚木 治子
 田中 千穂

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第3木曜・午後1時	本所ビッグシップ	山中みどり	太田絹映
第三例会	第1月曜・午後1時	新宿区大久保 ルノアール	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	吉澤純枝 山田美佐尾
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋廼代	森本早苗
婦人句会	第3月曜・午後1時	水明発行所	山中順子	西山貴美子
若松句会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	菊池ひろこ 石田慶子

水明例会案内

水明 令和元年十月一日発行 毎月一日発行

(第九十二巻 第十号) 定価 一〇〇〇円